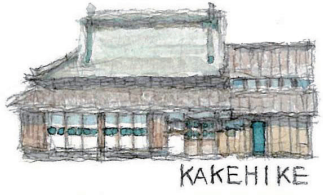
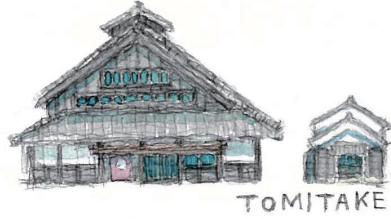


あいちの
たてもの
すまい編

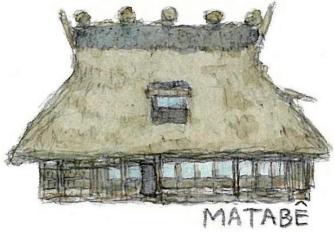
AITI NO TATEMONO SUMAI HEN



KAKEHIKE



TOMITAKE



MATABE

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS,
GOVERNMENT OF JAPAN



KAWATAKE

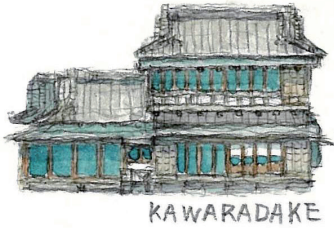


TAMESABURŌ KINENKAN

REGISTERED
TANGIBLE
CULTURAL
PROPERTY



KYŪ HONDATEI

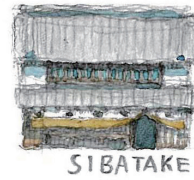


KAWARADAKE

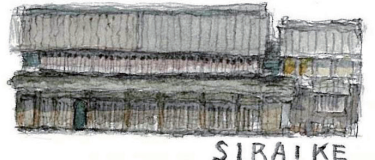
あいちのたてもの
すまい編



OGURIKE



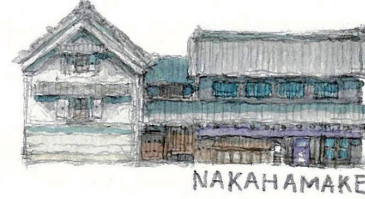
SIBATAKE



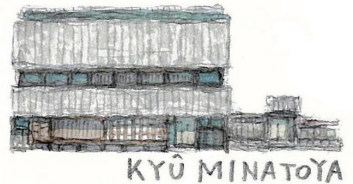
SIRAIKE



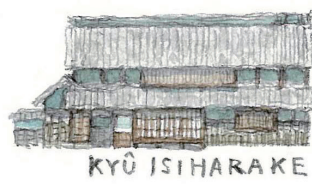
OZEKIKE



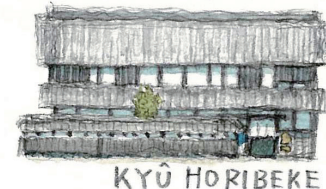
NAKAHAMAKE



KYŪ MINATOYA



KYŪ ISIHARAKE



KYŪ HORIBEKE

愛知県
国登録有形文化財
建造物所有者の会

愛知
登文
会

あいちの
たてもの
すまい編

あ い ち の
た て も の
す ま い 編

絵と文 村瀬良太

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会



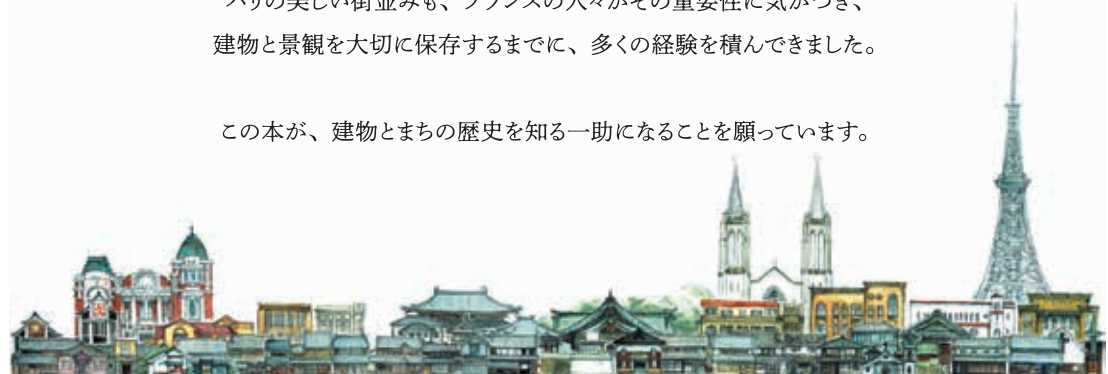
あいちのたてもの
すまい編
MAP

- ① 小栗家住宅 »p.12
- ② 柴田家住宅 »p.14
- ③ 白井家住宅 »p.20
- ④ 中瀨家住宅 »p.22
- ⑤ 尾関家住宅 »p.24
- ⑥ 算家住宅 »p.26
- ⑦ 旧湊屋 »p.30
- ⑧ 富田家住宅 »p.32
- ⑨ 川田家住宅 »p.36
- ⑩ 旧石原家住宅(石原邸) »p.38
- ⑪ 川原田家住宅 »p.40
- ⑫ 又兵衛 »p.44
- ⑬ 旧堀部家住宅(木之下城伝承館 堀部邸) »p.48
- ⑭ 為三郎記念館 »p.50
- ⑮ 旧本多忠次邸 »p.56
- ⑯ 有楽苑 如庵 »p.16
- ⑰ 三井家住宅 »p.42
- ⑱ 博物館明治村 »p.52

はじめに

私たちのまわりには、
 古めかしい洋館や、立派なお屋敷、歴史のある校舎に、
 清楚な神社、荘厳な寺院や、可愛らしい教会、
 そして大きなレンガの工場に、役割を終えた電波塔など、
 年月を重ねた建物がごく自然にまちにとけ込んでいます。
 そういった文化財として貴重な建物を、国登録有形文化財といえます。
 日本には他にも、重要文化財や国宝などに指定された建物があり、
 現在その総数は、1万6000件ちかくに上ります。
 市指定・県指定のものを含めると、さらにその数は増えますが、
 一方で、フランスの規定する歴史的記念物の4万6000件には遠くおよびません。
 日本は文化的には、まだ発展途上なのです。

本書は、愛知県にある国登録有形文化財の魅力を紹介する本です。
 今回は「すまい編」として、江戸時代から昭和にかけて建てられた農家や町家、
 武家屋敷や洋館などの住宅を取り上げています。
 それらはすべて、あたりまえに残ってきたわけではありません。
 多くの人々の努力で残されてきたものも少なくないのです。
 そういった意味では、残された建物はすべて価値のある良い建築といえます。
 そんな身近にある良い建築を知ること、
 私たちのまちとその風景を大切に思う気持ちにつながってほしいと思います。
 パリの美しい街並みも、フランスの人々がその重要性に気がつき、
 建物と景観を大切に保存するまでに、多くの経験を積んできました。
 この本が、建物とまちの歴史を知る一助になることを願っています。



もくじ

はじめに	2
愛知の建物、住まい編	4
【コラム】建物を楽しむために	10
◆ 住む	11
小栗家住宅	12
柴田家住宅	14
『特集1』素人でも楽しめる！茶室の見かた	16
白井家住宅	20
中瀆家住宅	22
尾関家住宅	24
寛家住宅	26
【コラム】建築家の自邸	28
◆ 活かす	29
旧湊屋	30
富田家住宅	32
【登録文化財で屋敷を】	34



川田家住宅	36
旧石原家住宅(石原邸)	38
川原田家住宅	40
『特集2』三井家住宅	42
又兵衛	44
【コラム】重要文化財望月家住宅	46
◆ 開く	47
旧堀部家住宅(木之下城伝承館 堀部邸)	48
爲三郎記念館	50
『特集3』博物館明治村の住まい	52
旧本多忠次邸	56
【コラム】三州足助屋敷	58
飯田喜四郎先生特別インタビュー 「住宅を文化財として残すこと」	59
あいたて博と online あいたて博について	60
国登録有形文化財とは	62
愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは	62

愛知の建物、 住まい編

はじめに

まるで地面から生えてきたかのような茅葺屋根の農家や、街道に沿って町家が軒を連ねる姿は、日本の美しい原風景です。

意外に思われるかもしれませんが、このような住まいの調査や研究が本格的に始まったのは戦後になってからで、比較的新しいジャンルになります。

この本で紹介する建物は、江戸時代から戦前までに建てられた登録文化財の住宅たちです。そこには、長い歴史の中で変遷を遂げてきた日本人の暮らしのかけがえなく残されています。

竪穴住居と高床住居

農家や町家でもっとも古いかたちを残しているのが土間です。その歴史は縄文時代の竪穴住居まで遡ることができます。竪穴住居は、5〜10mくらいの円や隅の丸い四角い平面を50cmほど掘り下げ、その中に4本の柱を立てて木で繋ぎ、そこに細い木を斜めに立て掛けて草や木で屋根を覆って作ったと推測されています。また、中央には炉があり、屋根には煙抜けの窓があつて、入母屋造に近い形をしていたと考えられています。

このような土に接した暮らしは平地に移行した後も残り、寒冷地の農家では戦後になっても土の上に藁を敷いた土座での住まいが確認されています。熱田神宮にある又兵衛では、そんな原始の暮らしの雰囲気を感じることができます。

一方で、床も古くから日本人の住まいの中にありました。その起源は、弥生時代に稲作とともに渡ってきた米を保存する高床の倉に遡ります。農耕に使用された鉄器は木を製材する道具にも用いら

れ、加工された木材同士を組み上げることで頑丈な倉が作られました。

その後、高床の倉は豪族の家や神の住まいへ転用されたと考えられ、伊勢神宮などの古い歴史を持つ社殿にその姿が伝えられています。

寺院の講堂と寝殿造

6世紀ごろに伝来した仏教は、日本の建築にとつても大きな画期となりました。寺院建設では礎石に柱を立て、長押などの横材で固定し、梁や桁で軸組みを作つて小屋を架け、軒先を組物で支えて、垂木の上に土を敷き、瓦を載せました。これは、後に続く木造建築の根幹となり、ほぼこの段階でそれが出来上がったことを示しています。

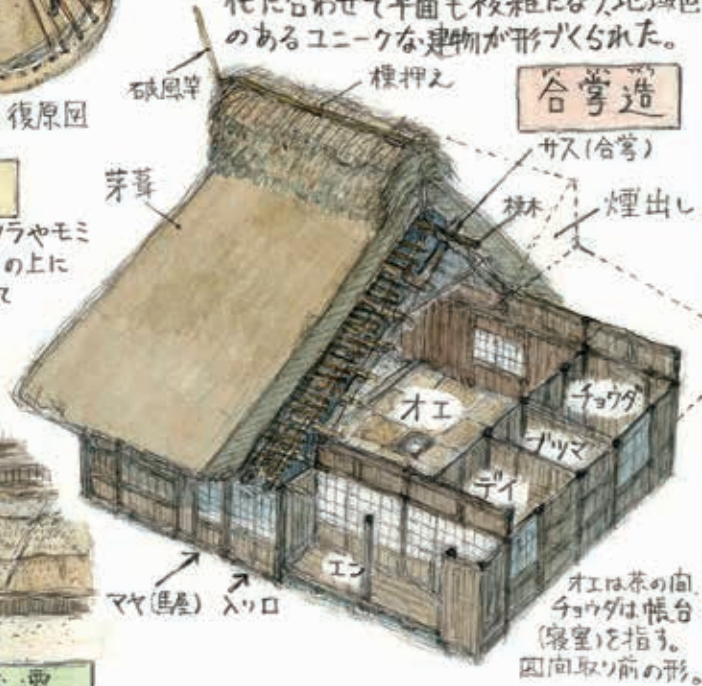
また、寺院の講堂の形式は、平城京や平安京の役所をはじめ貴族の住まいにも用いられました。法隆寺東院の伝法堂は、平城京にあった聖武天皇の橘夫人の住宅を移築したもので、講堂と同じつくりの建物ですが、寺院と違って床が張られて

農家の図解

農家のつくりは、竪穴住居から続く、土間を中心に発達していったことが分かる。特に近世以降は、農家の大型化に合わせて平面も複雑になり、地域色のあるユニークな建物が形づくられた。



竪穴住居復原図

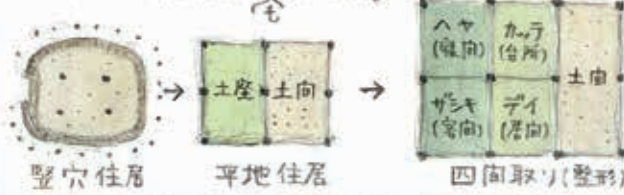


土座

土間の上にワラやモミガラを敷き、その上にムシロを垂べて着した。

平面の変遷

時代を経て、居住空間が分節されていった農家の向取り。また土間は作業場として使われた。



いるのも特徴です。

平安時代になると、それら貴族の住まいが発展して、寝殿造と呼ばれる形式が出来上がりました。寝殿(主屋)と対屋を廊下で繋ぎ、寝殿の前には白砂の庭と池が築かれました。

また屋内は、御簾や几帳、障子、屏風、御帳台、置き畳などで飾り、これを室礼といいました。「源氏物語絵巻」などの絵図には室礼による艶やかな暮らしが描かれています。

ところで、「年中行事絵巻」などには平安京の市井の暮らしが描かれ、板葺の町家が軒を連ねている姿も確認できます。町家はみちに面してミセを開き、細長い屋内には土間が奥まで通っていたことが描かれています。

書院造と教寄屋造

400年近く続いた平安時代が終わると、武家が権力を握る社会に移行しました。上級武士の住まいは当初、寝殿造を受け継いだものですが、後に中国の禅

宗文化の影響を受けて変容し、書院造という形式をつくり上げました。

書院造の特徴は、床の間や違棚、付書院などの座敷飾りを部屋に作り付けたことにあります。それらは元は仏画の前に置かれたテーブルや、中国の茶器や本を飾る棚、そして書き物をする出机だったものです。また寝殿造では座る場所に置かれた畳が、床全面に敷き詰められたのも大きな発展でした。

そんな高度な造作が可能になったのは、中世を通じて建設技術が飛躍的に発達したことがあげられます。大鋸や台鉋の登場が角材や板材の製造を容易にし、角柱と障子などの引き違い建具を用いて部屋を分け、天井の張られた室内空間をつくり出しました。

書院造は対面と接客を重んじた武家文化として定着し、15世紀末に造営された慈照寺(銀閣寺)の東求堂の時点で、私たちが知る和室の姿がほぼ完成されていたことが分かります。富田家住宅や旧堀部家住宅には、そんな武家の住まいの

趣が残されています。

一方で、禅宗と共に伝えられた喫茶文化が発展して茶の湯を生み、侘び寂びに美を求めた独特の世界は、安土桃山時代に千利休によって大成されました。また、茶事を営むために考案された茶室の意匠が教寄屋造へと受け継がれて、書院造とは趣の異なる座敷飾りを生み出しました。為三郎記念館の座敷飾りはこの流れを汲んでいます。

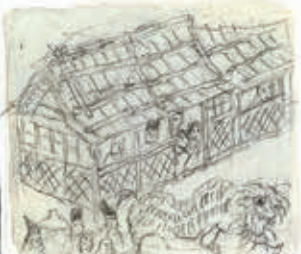
江戸時代の民家

江戸時代になると、武家の文化は町家や農家にも浸透していきました。ただ格式を重んじる武家社会では厳しい身分制度が敷かれ、書院造は武家以外には禁じられ、贅沢な座敷飾りや立派な門、玄関を設けることも制限されました。

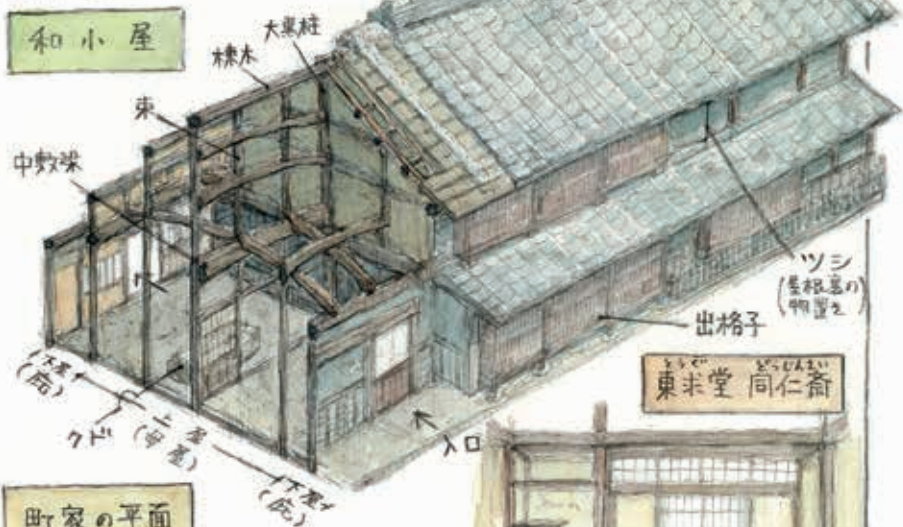
一方、江戸や京都などの都市と、それらを繋ぐ東海道や中山道などの街道沿いには町家が軒を連ね、土間にミセ、ナカノマ、ザシキが並列する間取りが普及しました。また防火対策として塗屋

町家の図解

町家のつくりは、古代都市の頃に遡る。グリッドに区分けされた道に面して、平入りの母屋と底からなる建物が連続して建ち、農家と同じく土間が通り、ミセや居室が並列するカタチが出来上がった。



「年中行事絵巻」平安期の町家



町家の平面



左図は典型的な南西風町家模様の向取り。規模に応じて床上の空間が拡張されていき、大型化していった。

奥の部屋ほど格が高くなるよ



銀閣寺にある東求堂の一室。書院造のカタチがほとんど出来上がっている。

造や瓦葺屋根も普及し、近世の町並みが形成されました。柴田家住宅や白井家住宅、中濱家住宅、尾関家住宅、旧湊屋、旧石原家住宅などの町家は、その名残をとどめています。

また、各地方で特色のある大型の農家が建てられたのも江戸時代になってからです。居室は、土間とデイク、カッテ、ザシキ、へやで構成される四間取りのような各部屋に分けられ、地域によってはさらに多様な変化を遂げました。それら平面对応して屋根も複雑になり、特徴的な農家の姿がかたちづくられました。寛家住宅や川田家住宅も、そんな農家の建物です。

洋館と中廊下型住宅

江戸時代が終わり、明治の世が始まると、日本の社会は劇的な変化を遂げます。長崎や横浜、神戸などの港町には外国人の住まいとなる居留地が開かれ、ここではベランダ付きの洋風住宅が建てられました。また都心でも、政府の要人や華

族、商人たちが洋風の住まいを求め、西洋スタイルの生活が取り入れられました。一方で、市井の人々の住まいは、依然として江戸時代の頃のままでした。ただ、かつては許されなかった豪華なつくりの住宅が各地に建てられ、また洋風建築の影響で背の高い2階建ての町家や農家も普及しました。小栗家住宅はそのような豪商の豊かな暮らしを伝える代表的な住宅です。

ところで洋風住宅は、それまで日本の住まいで顧みられなかった個人のプライバシーや、不衛生な台所など設備環境の問題点について意識の変革を促し、大正時代に興った住宅改良運動へと繋がっていきます。

中廊下型住宅は、そんな問題意識を受けて登場した住まいで、中流階級の人々に広く受け入れられました。基本構成は、廊下を中心に北に台所や女中部屋、風呂、便所といったサービス部を置き、南に客間や居間を配置することで、各部屋のプライバシーを保つことが考えられました。

一方で、客間と居間は襖を開けるとひとつなぎの部屋となり、接客空間が未だに暮らしの中心にあったことも窺われます。川原田家住宅や旧本多忠次邸からは、そんな中廊下型住宅の暮らしを感じる事ができます。

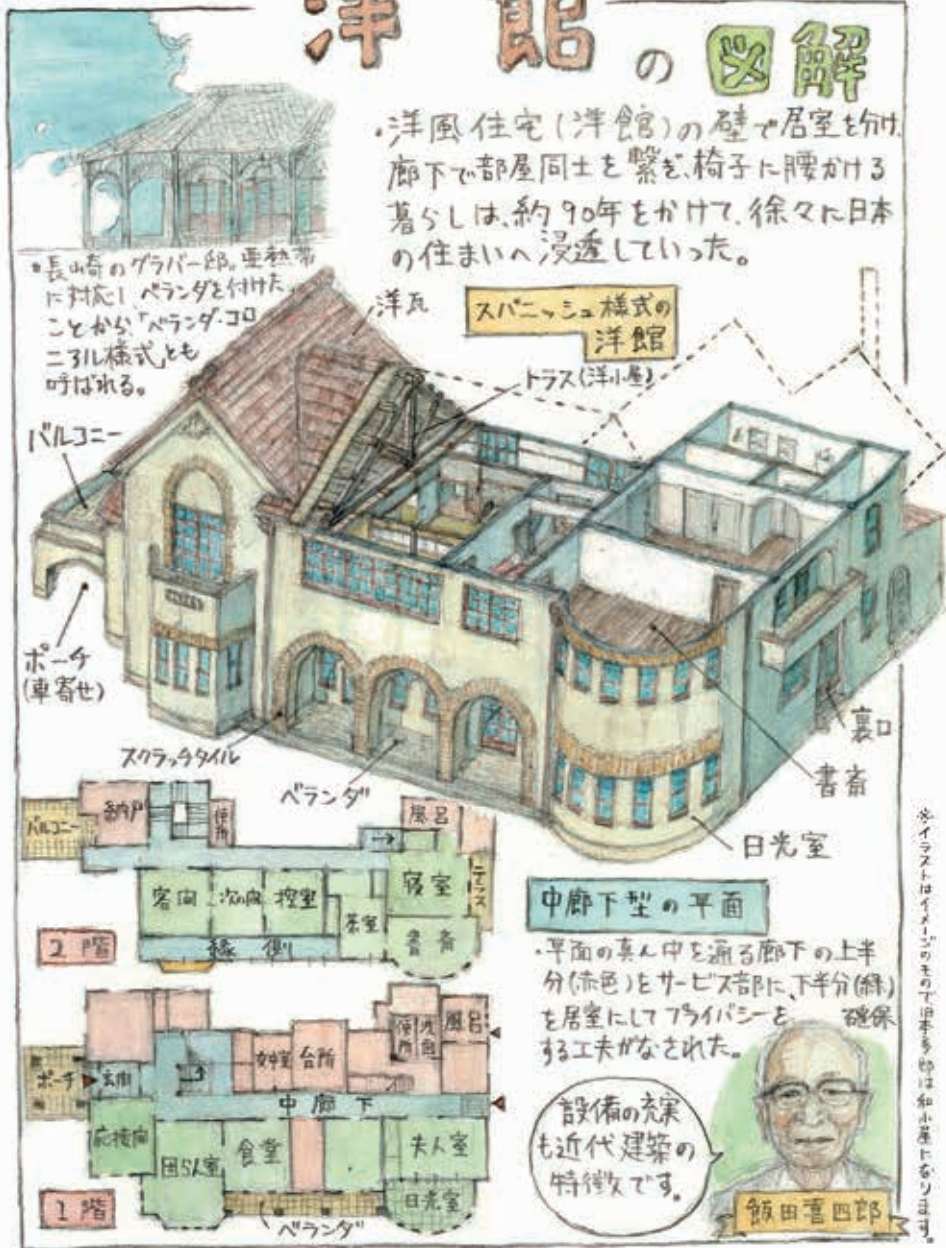
おわりに

古くから続く日本人の住まいを劇的に変えたのは、太平洋戦争だったと言われています。全国で260万戸を超す住まいが失われ、戦後復興期の乏しい資材で建てられた住宅からは、長く暮らしの中心にあった客間も姿を消しました。

現在の私たちは、電化製品や空調設備が発達し、快適な住まいで暮らせるようになりました。その一方で、寒くて手間のかかる住まいでの暮らしに、強く憧れる瞬間があります。ひよっとしたらそれは、利便さの中で忘れてきた大切な何かが残されていることを感じているかなのかもしれない。

洋館の図解

洋風住宅(洋館)の壁や居室も、廊下で部屋同士を繋ぎ、椅子に腰かける暮らしは、約90年をかけて、徐々に日本の住まいへ浸透していった。



※イラストはイメージのみの下書き。実際は和小屋に寄り添う。

中廊下型の平面

平面の真ん中を通る廊下の上半分(赤色)とサービス部に下半分(緑)も居室にしてプライバシーと確保する工夫がなされた。

設備の充実も近代建築の特徴です。



長崎のグラバー邸、豊後県に村立し、ベランダを付けたことから「ベランダコロニアル様式」とも呼ばれる。

バルコニー

ポーチ(車寄せ)

スクラップ

バルコニー

ポーチ

1階

住む

吉田兼好は『徒然草』の中で「家の作りよは夏をむねにすべし」と書いた。
しかし実際は、冬の日本家屋には隙間風が吹きこみ、とても寒い。
そんな暮らしが感覚を研ぎ澄まし、季節の僅かな変化にも敏感になるという。

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物を見るだけで楽しいものです。旅先や、いつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するならば、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気を感じてみましょう。もし上手いかわからない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【住まいの見方を工夫する】

実は、住宅ほど読み解きが難しい建物はないかもしれません。それは、年代や様式で区分けすることが難しい上に、増改築されることも多く、また建てた人のキャラクターに大きく左右されるからです。

ただ、もっと簡単に住宅を楽しむ方法もあります。

それは、床や畳に腰を下ろすこと。洋間の場合は椅子に腰かけることで、立ったままでは感じられなかった空間の良さが浮かび上がってきます。そしてもうひとつが、建具を開閉してみる。特に茶室や座敷など凝った意匠の部屋では、ディテールの造作がまるで違って見えるはず。です。

もちろん、いずれの場合も所有者に許可を取るのがエチケットです。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょ。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができ、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

登録 / 2004年3月

登録基準 / 造形の規範となっているもの(主屋・書院・茶室・渡り廊下)

国土の歴史的景観に寄与しているもの(表門・辰巳蔵・北座敷)再現することが容易でないもの(雜れ)



photo: Hisao Takeuchi / Koji Oguri

主屋の外観。通柱を見せず、繊細な格子と障子の平面的な構成が、軽やかで美しい表情を生み出している

小栗家住宅

半田運河沿いに佇む、煎茶文化の華やぐ大邸宅



土間に架かる荒々しい仕上げの牛梁

愛知屈指の名邸

愛知の多様な登録文化財の中には、重要文化財に勝るとも劣らない文化的価値の高い建物もあります。その筆頭にあげられるのが小栗家住宅です。

現在はミツカンミュージアムで賑わう半田運河の源平橋あたりは、かつて蔵が立ち並ぶ町並みで、小栗家はそこで萬三商店という屋号で醸造業や肥料、米穀を扱う商売を営んでいました。小栗家住宅は店舗兼住宅で、間口30m、奥行き110mの広大な敷地に、主屋を

はじめ書院や茶室など14もの建物が建ち並び、美しい庭が築かれています。

十代目小栗三郎兵衛と煎茶文化

小栗家のルーツは室町時代の小栗判官に辿るといわれ、江戸末期ごろに鱒や大豆粕を用いた肥料の製造と販売で半田屈指の豪商となりました。十代目小栗三郎兵衛は、苗字帯刀と二代限御目見えを許され、明治になると愛知県区長や県会議員を務め、半田の発展に貢献しました。

しかし、身体の調子を崩して40代で隠居すると、以降は数寄の世界に耽溺していきます。



瀟洒な意匠が美しい煎茶室

その頃に建てられたのが現在の小栗家住宅の大本となる建物群で、施された意匠には、当時流行していた煎茶文化のしつらえが取り入れられました。

華やかな意匠

繊細な格子が美しい主屋の旧事務所に入り、奥へ続く土間を進むと、クドに巨大な樗の牛梁が架かり、見るものを圧倒します。煎茶ではこのような奇木が重用され、玄関の式台には同じ樗の磨き上げられた一枚板も用いられています。

式台を上がると、18畳の大広間の先に華やかな意匠の煎茶室があります。庭の見える大きな障子窓や、複雑に編まれた網代天井、紫檀の透かし窓に陶製の換気窓などの美しいしつらえは、煎茶で重用された中国風のデザインです。また透かし窓の先には黒檀でできた仏壇があり、彫刻には中国の故事がほどこされています。

広大な邸内には、他にも明治23年の大演習の折に有栖川宮熾仁親王が宿泊した書院などがあり、いずれの建物にも格調の高い座敷飾りがつくられ、三郎兵衛の高い文化的教養を窺うことができます。

モッコウバラと銘酒「愛してる」

小栗家住宅にはもうひとつ見どころがあります。それは表門の先に植わる、半田市指定天然記念物「萬三の白モッコウバラ」です。毎年4月中下旬に、甘い香りとともに真白い花が一面に咲く光景は半田の風物詩の一つとなっています。

十四代目当主の小栗宏次さんは、モッコウバラの花酵母から日本酒の製造に成功し、ハート型の蕨から「愛してる」と名付けました。貴重な文化財を受け継ぎつつ遊び心のある事業にチャレンジする小栗家住宅には、今も数寄の心が息づいています。



モッコウバラの映える小栗家住宅

1870年(明治3年)・1887年(明治20年)増築
主屋 / 木造2階建て 寄棟造瓦葺き
〔棟梁〕小栗善七
半田市 中村町1-18



photo:Hiroshi Yoshida

敷石を転用した土間と和モダンの客間が隣り合う美しい空間。中心を縦に走る大梁にも注目

柴田家住宅

美しく住みこなされる、美濃路の町家



外観をみる。出格子は改修時のもの

枇杷島地区の町家

名古屋の宮宿から岐阜の垂井宿を結ぶ美濃路には、いまでも情緒ある町並みが点在しています。柴田家住宅は、庄内川の自然堤防を通る美濃路に面した町家で、近世の雲囲気と現代の暮らしが共存する住宅です。

出格子が目を引き、外観の大戸をくぐると、線路の敷石を転用した土間が広がります。自然に摩耗した敷石は踏みごたえもよく、また

文化財に申請し、「あいたて博」などの活動にも積極的に参加されています。

城下町名古屋の情緒

江戸時代以降、尾張地方にはお茶の文化が根付き、柴田家にもツシや主屋の内庭に茶室が設けられています。かつてこのあたりの町家では、抹茶が日常的に振る舞われていました。また現在でも、西枇杷島まつりでは山車にあわせて野風炉が随行し、旦那衆に野点を振る舞う風流な文化が残されています。

夕暮れ時の枇

杷島橋から眺める庄内川は格別です。そのすぐ傍の美濃路では、出格子から光の漏れる柴田家住宅が、情緒あふれる姿でひっそりと佇んでいます。



夜景。格子越しに漏れる光が美しい



2階の和室。中心の間柱は後に足された

リフォームされた町家
戦後になり、下小田井の市場が移転すると、西枇杷島付近は衰退し、かつての町並みもしだいに姿を消していきました。また柴田家住宅も、飴屋を廃業し、その後は保険会社などに賃貸されていました。
ご当主の柴田正康さんは、退職を機に傷んでいた建物を修復し、町家の特徴を活かしつつ、現代の暮らしに合わせた環境を整えました。設計に際しては建築家と何度も意見交換を重ねたといいます。また、その過程で登録

艶のある表面に朝日が差し込む瞬間はひととき
わ美しい姿を見せてくれます。

この土間ではかつて、飴や菓子の製造と販売を行っていたといい、広い空間を得るために中心の柱が抜かれています。その荷重をささえるために十字梁が架けられていて、これは尾張地方の町家に見られる特徴から「尾張型町家」とも言われています。

土間の横には落ち着いた和モダンの客間が設えられ、広々とした空間がとてもし心地よいです。

下小田井の市と柴田家住宅
柴田家が美濃路に店を構えたのは江戸末期ごろで、近郊には江戸時代になって開かれた下小田井の常設市があり、枇杷島あたりの美濃路も発展しました。
現在の柴田家住宅は濃尾地震後に再建された建物で、外観を漆喰で塗り籠め、側壁を土壁にするなど防火対策を施す一方、内部は構造的な強度より瀟洒なしつらえに重きをおいた造りとなっています。土間の十字梁もその一環で、2階の客間では中心の柱を抜き、壁面の間柱も削られて塗り籠められ、より広々とした印象の空間になっています。

1896年(明治29年)／2008年(平成20年)改修
木造2階建て、切妻造様瓦葺き
【設計】不明 【改修】林廣伸建築事務所
清須市西枇杷島町辰新田65

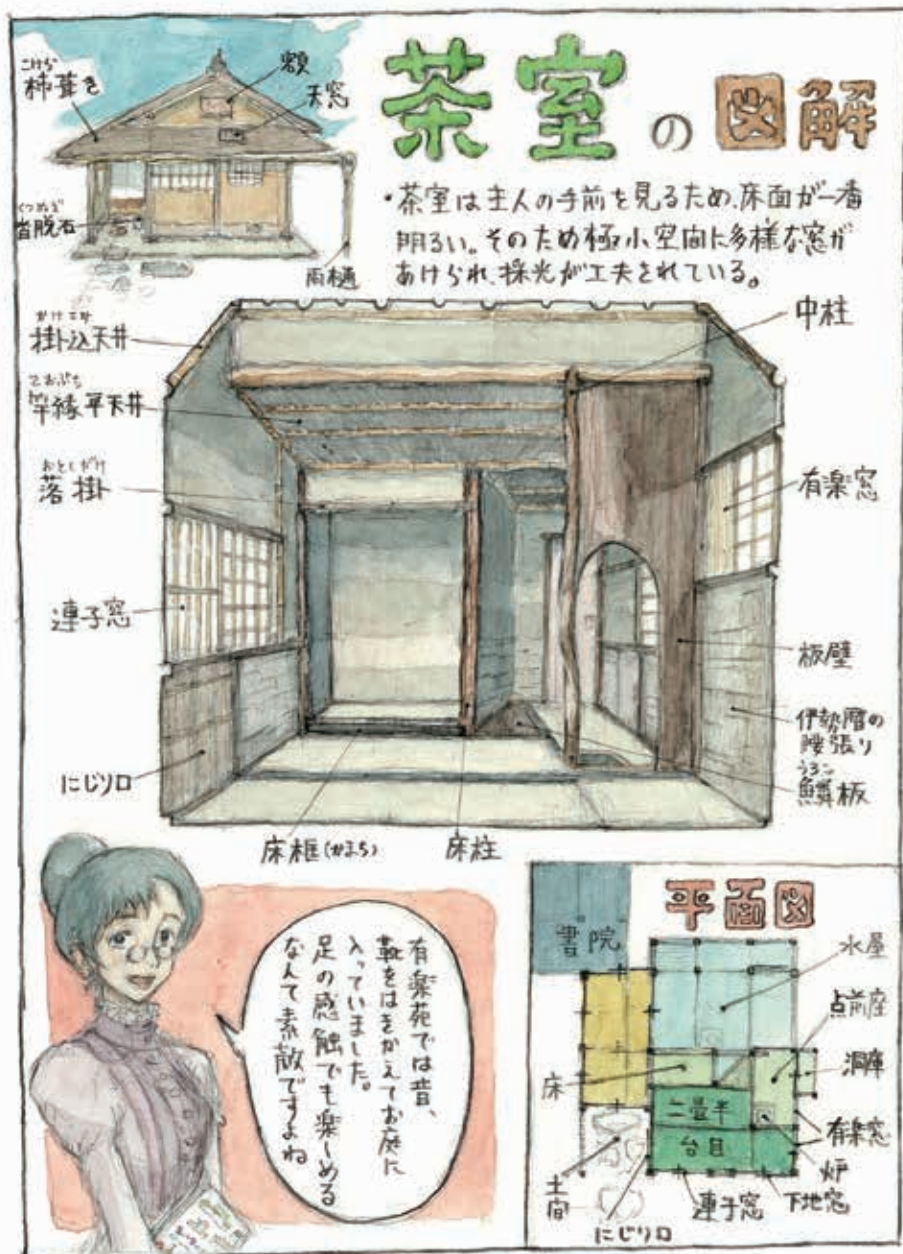


photo: Akihiko Mizuno

如庵の外観。庵のような姿に、軽やかで気品のある立ち姿がひときわ目を引く。これほどの名作に近くて会えるのが嬉しい

素人でも楽しめる！ 茶室の見かた

特集 1

茶室を楽しむ！

茶室は日本建築の中でもとりわけ特殊な建物です。閉じた狭い室内に洗練された造作を施し、侘びの美学に貫かれた静寂の空間は、世界にも類のない建築美を生み出しました。

一方で、茶室は茶事のための建物なので、茶の湯に通じていないと近寄りづらい側面もあります。

ここでは、気楽に茶室の良さを楽しめるような見方をご紹介します。

国宝如庵の姿

まずは愛知が誇る名作中の名作から。犬山有楽苑にある国宝如庵は、織田信長の実弟織田有楽斎の作で、元は京都の建仁寺にありましたが、幾度かの移築を経て、犬山に移されました。移築と庭園を手掛けたのは、茶室研究の第一人者で名建築家の堀口捨己です。

柿葺き屋根の小さな茶室にはたくさん窓が開けられ、とても軽やかです。また田舎屋風の造形は茶室建築の特徴で、苔庭に黄土色の建物がそと置かれたような姿が美しいです。

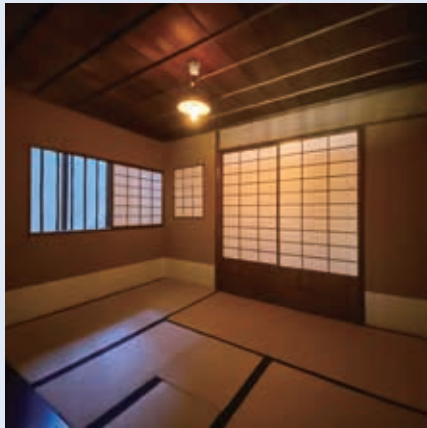


柴田家住宅の茶室。庭の点景ともなっている

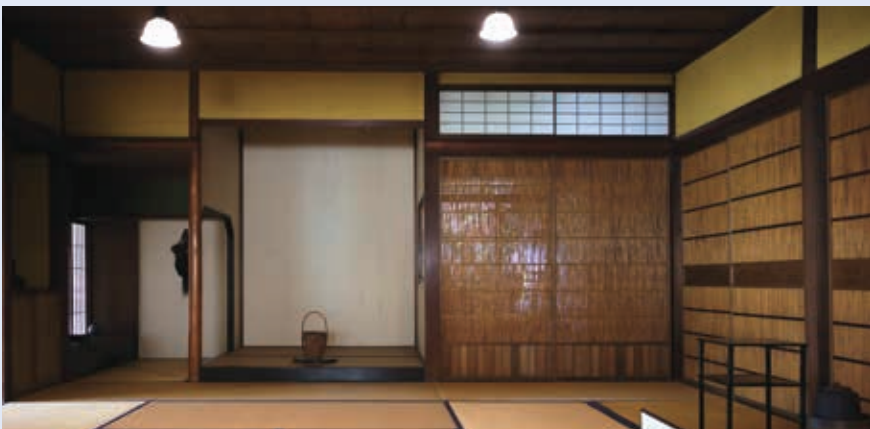
にあった東松家住宅にも2階に茶室があり、名古屋の町家ではこのような茶室が多くつくられていましたが、戦災を受け現在ではほとんど残されていません。

最後に、小栗家住宅の興味深い茶事をご紹介しましょう。情報科学を専門とするご当主の趣向で、床の間にプロジェクトションマッピングを応用した茶席が催されました。

茶室は、軽やかに移築され、一方で伝統を受け継ぎ、またプロジェクトションマッピングなど新しい趣向にも対応できる、幅広い魅力を持った建物なのです。



東松家住宅2階の茶室。吹き抜けの青い光が良い



小栗家住宅の14畳の主座敷。立派な床構えのあるこの部屋でも茶事が催される

中に入ると、ほぼ四畳半のとても狭い空間に畳が3枚半敷かれ、正面には床の間があります。炉の切られた点前座を除けば、わずかに2畳半の空間に、赤味がかつた床柱の鋭い造形や、伊勢暦の張られた腰壁、艶やかな板壁と中柱など、溢れんばかりの創意工夫が施され、それでいて各々が見事に調和しています。これらは畳に座ることにより鮮明に目



如庵の室内。普段は非公開だが窓から内部を覗きこめる

に写り、時間を忘れて見入ってしまいます。如庵は、灰のひと粒にまでこだわる茶の湯の深奥を垣間見ることができると名建築です。

登録文化財の茶室たち

名古屋市のみならず、そんな如庵に倣った知足庵という茶室があり、ふたつを比較することで昭和の茶人がどのように本家を



為三郎記念館の知足庵。如庵に倣っている

写したのか、その工夫を楽しむのも一興です。また江戸時代からお茶の文化が深く根づく尾張地方では、柴田家住宅のようにツシと内庭に茶室があり、現在でも日常のお茶に親しんでいます。明治村にあるかつて堀川沿い



photo: Akihiko Mizuno

東海道に面した外観。改修された格子の奥にガラス戸を設けている。囲炉裏の煙がツシの出格子から上る

白井家住宅

囲炉裏の火がゆらめく、魅惑の町家暮らし



土間の横のミセとオクミセを見る

東海道御油宿近くの造り酒屋

名鉄国府駅の目の前を走る、車通りの激しい国道1号線の近くに、囲炉裏を囲んで昔ながらの暮らしを営む白井家住宅があります。

駅の名前が示すように、このあたりは古代律令制で置かれた三河国の国府や総鎮守社の大社神社があり、近世には御油宿が設けられた歴史の古いまちです。白井家は東海道沿い

豊かな暮らし

白井家住宅でとりわけ印象深いのは、イマの囲炉裏です。改修時に作られたものが、毎日火がくべられ、すっかり風合いを帯びています。パチパチと音をたてて揺らぐ囲炉裏の炎は、根源的な安心感を与えてくれるように、時間を忘れて見入ってしまう。

ご夫妻は空調設備のない環境で、朝起きると散歩に出掛け、昼は時を割り、日が沈むと本を読んで床に就くような暮らしを送っています。一方では、近所のコンビニも良く利用し、町中の古民家で上手にスローライフを満喫しています。



囲炉裏の炎。思わず引き込まれる

で江戸末期に造り酒屋を興した商家で、かつて敷地には酒蔵や酒造蔵が立ち並んでいました。

白井家住宅修復プロジェクト

白井家では平成まで造り酒屋が続けられましたが、廃業すると町家以外の建物を手放し、所有者のひとりでものつくり大学名誉教授

の白井裕泰さんは、傷むに任せていた建物をゼミの学生や大工棟梁の高橋定信さんの助力を得て、2005年から修復し始めます。プロジェクトはトステムやLeeXールなどの企業の研究助成を受けました。

傾いた建物を屋根こしし、傷んだ柱を根接ぎし、土台を取り替え、床を張り直し、格子



ナカノマの棚。煙で乱反射した光が美しい

戸を新たに設けるなど、大掛かりな修復プロジェクトは数年に渡って行われ、工事は今も継続されています。

ワンルームの町家

改修途中の白井家住宅ですが、現在は弟の伸治さんご夫妻が住み、建物を管理しています。

格子戸の玄関から土間へ入ると、修復されたミセやオクミセ、ナカノマとイマが繋がった開放的な空間となっています。また格子内側の土縁にはガラス戸が設けられ、道路に面した部屋と外部を緩衝する役割を果たしています。

この大きなワンルームのような空間は、大社神社の夏祭りのときには山車を見る休憩所として開放され、また地元のアハウスの憩いの場としても利用されています。

土間の先は小屋組みがむき出しの吹き抜け空間となり、奥のダイドコロまで繋がっています。土間の上部には波板ガラスの窓があり、ここから注ぐ朝日は小屋組みや土間に積まれた古物をきらきらと輝かせます。また拡散された光は建物の奥まで染み渡り、日常の風景を静物画のように美しく浮かび上がらせています。

江戸末期
木造2階建て切妻造瓦葺き
[設計]不明 [改修] 白井裕泰、高橋定信
豊川市国府町流霞157



photo: Akihiko Mizuno/Sayaka Ito

中濱家住宅外観。妻側を見せる土蔵と平入屋根の主屋から板塀が続き、美しい町並みを形成している

中濱家住宅

有松の町並みを形成する、表情豊かな町家



ミセに陳列された有松絞りの品々

間の宿有松の顔

名古屋市内でもっとも情緒ある町並みを残す有松。東海道沿いではありますが、間の宿だったため宿はなく、藍染に絞りで模様をつける有松絞りで発展し、今も立派な町家がいくつも店を構えています。

名鉄有松駅から南下して東海道路に出て、東西に伸びる風情のある町並みを東へ。緩やか

に蛇行する街道を進むとすぐに、青みがかつた灰色の土蔵と、格子に紫色の暖簾が掛かる中濱家住宅が見えてきます。平入の屋根が続く町並みに、切妻屋根を正面に向けた土蔵のフォルムが楽しいリズムを与えています。

中濱家住宅探訪

土蔵や主屋の虫籠窓に塗り込められた黒漆喰は、1784年の大火以降、防火のために外観に施された名残で、有松の町並みの特徴となっています。

格子の入り口から暖簾をくぐると、L字の土間に、ミセ、ナカノマ、ザシキが並ぶ近世町家の構成がそのまま残り、店内にはあでやかな有松絞りの品々が飾られています。

一方、上客は裏手の立派な住宅門から招かれ、枯山水の庭を通って茶室へ入り、お茶を楽しんでから商談したといえます。



ザシキの奥にある茶室。上客を招いた

また以前は、主屋に隣接する長屋門の奥に作業場があり、藍染の大きな瓶が土中にたくさん埋まっていました。現在は駐車場に使用され、すみっこに並ぶ瓶が当時のようすを偲ばせています。

守られた風景

有松の町並みは、平成28年に伝統的建造物群保存地区になり、近世的な町並みの姿を留めるため、電柱を地中に埋め、一方通行化して車通りを規制するなどの努力が続けられています。その背景には、名古屋市が戦災復興計画の道路整備で、多くの古い町並みや建物を失ってきた経験に基づいています。

中濱家住宅は、元は山田与吉郎商店という絞り問屋が営む店でした。中濱家は別の場所の有松絞りの製造と販売を行っていました。この町家の取り壊しを聞き、引き取ることとを決定したといえます。その際、地域の人々の口添えや金融機関の協力があっていい、有松にとってこの建物がどれほど重要だったのが窺えます。

まちなみとしぼり

ちりめん状の柔らかい布地と自然由来の色

味に独特の模様が浮かぶ有松絞りは、かつては浴衣などに好まれましたが、洋装にあわせてマフラーやネクタイなどワンポイントで用いるのもオシャレです。また最近ではユニクロのコラボも話題となるなど、新しい可能性が探求されています。

そんな有松絞りが存続し再評価されていた背景には、美しい町並みが保存されていたことも欠かせません。伝統的な町並みと技術は車の両輪のように関わり合い、未だ見ぬ価値を秘めているのです。



有松絞りの生地。日焼け防止に裏側を展示

主屋 / 明治中期、土蔵 / 明治期
主屋 / 木造2階建て、切妻造瓦葺き、
土蔵 / 土蔵造2階建て、切妻造瓦葺き
[設計] 不明
名古屋市緑区有松2300
https://shibori-nakahama.com



photo: Akihiko Mizuno/Sayaka Ito

森の中に佇む主屋。板塀に囲われた前庭には庭門が開き、ツシの格子窓には「犬山焼」の看板が掛かっている

尾関家住宅

希少な犬山焼を継承する、隠れ里の窯元



ツシ内部の風景。古道具に光があたって美しい

森の中の町家

自動車の厄払いで知られる犬山成田山の麓に、江戸時代に確立された犬山焼の窯元の尾関家住宅があります。細い道から森へ続く奥まった所にあるため、看板が出ていてもうっかり見落としてしまいがちになります。

森への小道を進むと開けた場所に、山を背に平入の町家がたち、「犬山焼」の看板が掲げられています。また、森がなだれ込んだような前庭には板塀がめぐり、庭門が設けられています。

板塀の向こうには竹林が迫り、木々に覆われた町家の姿は、まるで昔話の隠れ里のような趣です。

尾関家と犬山焼

尾関家はもともと、犬山城下町の近くで瓦を制作していた御用瓦師で、国宝犬山城や寂光院などの名刹にも瓦を納めていました。それが1842年の大火の影響で現在地へ移り住んだと伝わっています。

瓦師だった尾関家が犬山焼を手掛けるようになったのは明治になってからで、それまで犬山焼を援助していた藩侯成瀬家の後ろ盾がなくなり、職にあぶれた陶工を受け入れたことがきっかけになったといえます。

現在では犬山焼を制作できる陶工はほと



ツギノマで展示されている犬山焼の陶磁器

んどおらず、幻の焼物ともいわれています。ただ、赤絵を施した華やかな絵柄は今も愛され、ご当主の七代目尾関作十郎さんは、地元の企業とのコラボ企画にも積極的に取り組んでいます。

陶工の住まい

現在、尾関家住宅の主屋は、若手作家の陶芸作品の展示や、絵付け教室のワークショップなどに使用されています。玄関を入ると広くて奥の深い土間があり、かつてここは大勢の陶工たちが食事を摂るスペースに使用されていました。

居室側へ目を移すと、6畳と8畳のツギノマの奥にザシキがあり、襖が開放された空間には、たくさんの陶芸作品が並んでいます。ザシキとツギノマの前には板塀で囲われた前庭があり、木々に和らげられた光が色とりどりの陶器たちを美しく見せてくれます。

土間に隣接するツギノマの奥にはツシへ上る階段があり、屋根裏へ重い荷物を持ち上げる滑車が残されています。ツシでは養蚕が行われ、資材の保管がされていました。尾関家のツシには、他にも古道具や絵図の拓本、博覧会で授与したメダル、古地図やパンフレットな

どたくさん古いものが残され、家や犬山の歴史を伝える魅力的な場所となっています。

暮れなずむ町並み

近年、主屋の裏手にある土蔵が改装され、内庭もきれいに整備されました。蔵内はギャラリーとして活用され、犬山焼の見事な大皿が飾られています。

森に囲まれ、辺りより早く日の落ちる尾関家からは、おだやかに暮れていく町並みが遠く見えます。その傍らでは、新しいアイデアと向き合う陶工が、日々創作に汗を流しています。



整備された土蔵と内庭

1842年

主屋 / 木造2階建て切妻造瓦葺き

【設計】不明

大山市大字犬山字白山平2

https://www.inuyamaya-ozeki.com



photo: Sayaka Ito/Hisao Takeuchi

庭から主屋を見る。低い床に浮かぶ障子が美しい。緑青色の銅板の下には茅葺屋根がある

寛家住宅

建築家が住みこなす、名駅そばの古民家



露地の眺め。季節の花々が出迎える

名駅付近の懐かしい風景

超高層ビルの立ち並ぶ名古屋駅のすぐ近く、発展する笹島エリアを横目に、近鉄の大きくカーブする線路を進むと、都心とは思えない懐かしい町並みが残っています。迷路のような細い道を辿ると、よく手入れされた庭に露地を開く、緑青色の銅板屋根が目印の寛家住宅があります。

主屋は明治初期に近くの農家を曳家した建物で、銅板の下は茅葺き屋根が残されています。敷地内は庭を中心に別宅や茶室、お稽古場などがコの字型に配置され、ゆったりとした外部空間が形づくられています。

庭と老松

鉄平石の敷かれた露地を進むと、立派な松

継承と普及に貢献しています。また平日は、高齢者のコミュニティスペースとしても利用されています。そんな活動が評価され、名古屋まちなみデザインレクシオンからはデザイン賞が贈られました。

夜の帳が下りた庭を足元の明かりを頼りに歩く露地は、ひととき美しく感じられます。上空には煌々と明かりが輝く超高層ビル群が伸び上がる、他にはない風景です。



以前は囲炉裏があった客間

が出迎えてくれます。寛家は能と縁が深く、この松は名古屋能楽堂の鏡板に描かれている老松のモデルになった銘木で、根元にひろがる苔や石灯籠とともに、美しい景色をつくっています。

松の先には主屋の玄関があり、左手にザシキと客間が並びます。床の低い農家の佇まいに真っ白い障子が浮かぶ姿はとても印象的です。

中に入ると、客間の天井を渡る湾曲した梁

が目を引きまします。このような歪んだ部材は強い荷重にも耐えられ、かつては小屋組みなどに好んで用いられていました。また、以前は客間に囲炉裏があり、自在鉤が釣られていたといえます。梁の奥に見える風合のある簀子天井は、その名残をとどめています。

建築家の住む家

一方、主屋の土間側はご当主で建築家の寛清澄さんの事務所に改築されています。軒先をくぐると、杉板に囲われた空間にはイームズチェアなどの名作椅子が置かれ、その奥には建築模型や蔵書が並び事務所スペースがあります。

寛さんは、自邸の登録文化財の申請をみずから行い、建物の修復に行政からの助成を得るなど、保存と活用の道を模索してきました。また、古民家での暮らしを通じて木造建築への造詣が深く、有松など町並み保存地区の建物の改装も多く手掛けています。

まちなコミュニティスペース

寛家住宅のもうひとつの特徴は、地域に開かれていることです。お稽古場では隔週の土曜日に子ども能楽教室が開かれ、伝統文化の



鼓の置かれたお稽古場の風景

江戸末期 明治初期移築
木造平屋建て・入母屋造茅葺き(銅板仮葺き)
[設計]不明
名古屋市中村区下米野町3-29

活かす

日本の木造建築は、建具を取り外すことで空間を広く扱うことができる。
元は住宅だった建物を飲食店に転用できるのはその為だ。
また、開け放した空間を自由に設えられる点も大きな長所となる。

photo:Akihiko Mizuno



photo:Hisao Takeuchi

column

建築家の自邸

【登録文化財に隣接するメタリックな住宅】

寛家住宅の敷地の一角には、ご当主で建築家の寛清澄さんが設計した自邸があります。ガルバリウム鋼板の外装や鉄骨で組み立てられたバルコニーなど金属質でエッジの効いた建物は、登録文化財の主屋と不思議なくらい馴染んでいます。

その理由は、敷地の中心にある庭が新旧ふたつの建物を緩衝する役割を果たしているから。絶妙のバランスで配置されているのは、ここで培われた感覚の賜物です。

また、いろいろな素材が散りばめられた外観も見どころです。細い道路と自邸を隔てる千本格子や、風通しの良いバルコニーの手すり、赤い玄関の扉にガラスブロックなどの遊び心のあるデザインが、建物に楽しい表情をつくっています。

そして、この住宅の一番の見どころは、明るく暖かい室内空間です。日当たりのよいリビングは12月でもほとんど暖房を使わないそうで、木に囲まれた柔らかい空間にル・コルビュジェの寝椅子が置かれ、とても居心地良さそうです。

また2階の天井の高い子ども部屋は、壁面上部の高窓から西日を探りいれる工夫がなされ、直射日光を避けつつ明るい空間になっています。

伝統的な木造建築と新しいデザインの建物が巧みに共存されているところも、寛家住宅の大きな魅力です。



photo:Sayaka Ito



photo: Hiroshi Yoshida

美濃路に面して平入に店を開く外観。交差点にたつため、ひときわ目立つ。木綿の暖簾が風に揺れて美しい

旧湊屋

絶品の郷土料理がもてなす、木曾川渡しの旧商家



縦並びの六間が繋がる広々とした店内

茶店湊屋

尾張地方の郷土料理を出す、とっておきの店を紹介しましょう。木曾川に架かる濃尾大橋の傍らの、金比羅神社の目の前にある茶店湊屋です。おすすめは季節ごとに献立を変える湊屋御飯。丁寧に下拵えされた料理は、美味しいだけでなくどこか懐かしく、食事のありがたさを感じさせてくれる逸品です。

かつてこのあたりは木曾川を渡る美濃路の起宿として栄え、湊屋も渡し船や船運をあきなう商家でした。

湊屋前史

美濃路には7つの宿場があり、起宿はちょうど中間あたりで、木曾川の渡河を控えた大きな宿場町でした。湊屋の小川文右衛門は、常夜灯の立つ金比羅神社の隣地に屋敷を構え、江戸後期から幕末にかけては綿木綿の仲買で財を成したといえます。

やがて時代は下り、明治になると一宮は繊維産業で隆盛し、起宿にもノギリ屋根の工場が次々と建てられ、まちは発展しました。小川家はその後東京に移り、日本で初めてデザインタオルを製造した「小川タオル」を興しました。

茶店のしつらえ

現在の湊屋の主屋は交差点にたち、ひときわ大きく見えます。石の基壇の上に出格子



並び立つ倉。奥が江戸後期の西倉

と板塀のならば外観は、ここだけ時代に取り残された感があります。それは、明治24年の濃尾地震でこの辺りの古い町家はほとんど倒壊し、今では湊屋しか残っていないからです。石段を上り、大きな木綿の暖簾をくぐると、庭側にも戸を開く開放的な土間があります。かつては奥まで続く通り土間で、屋根には煙抜きも残されていますが、現在は厨房と椅子席に改装されています。

土間の左手には、ミセ、ナカノマ、ダイドコ、ミセザシキ、ブツマ、ザシキの六間がひとつに繋がり、天井は低めながら水平に広い空間になっています。出格子や反対の内庭から入る穏やかな光と、季節の飾りやお花、屏風などのしつらえが来客を楽しませます。

主屋の裏手にはギャラリに改装された西倉と東倉があり、土蔵が並び姿が趣のある町並みをつくりだしています。

懐かしさを愛おしむ

戦後、空き家だった湊屋は、地元で繊維業を営む丹羽家が購入し、長く住まわれていました。しかし所有者が転居することになり、取り壊しを惜しんだ人々の協力でNPO団体「湊屋倶楽部」が設立され、管理と運営に当

たることになりました。

代表を務める大島八重子さんは、湊屋で提供される手間を掛けた料理を通じて、日本の伝統的な暮らしの素晴らしさを伝える活動が続け、今では多くの賛同者を集めています。本当に美味しい郷土料理を味わいたいときには、ぜひ湊屋へ足を運んでください。お腹も心も満足すること請け合いです。



滋味あふれる絶品の湊屋御飯

店舗兼主屋 / 明治前期・1948年(昭和23年)改築
店舗兼主屋 / 木造平屋建て切妻造機瓦葺き
[設計] 不明
一宮市起字堤町33-1
<http://minatoya.com/shop.html>



photo: Hisao Takeuchi

主屋の外観。病院の駐車場の一角にたち、和モダンでオシャレなレストランからは、いい匂いが立ち込める

富田家住宅

明治開業の病院敷地内にある、代官屋敷のレストラン



レストランとあわせて改修された土蔵

本宿の旧代官屋敷

登録文化財を地域活性化の起爆剤にする、とても興味深い試みを行う病院があります。

富田病院は、国道1号沿いの鉄道高架がひときわ目を引く本宿駅近くの地域密着型病院です。インパクトのある構造物を目印に脇道へ曲がると、並走する東海道本宿の町並みに溶け込んだ富田病院があり、その敷地の一角に旧代官屋敷を改装した絶品イタリアンの「ユギーノユーゴ」が店を構えています。

お店のあたりは絶えずいい匂いが立ち込め、土日になると予約でいっぱいになります。

富田病院小史

富田家は江戸中期から本宿の陣屋預かりとなった武家で、仕えていた旗本の柴田家に

代わりに、幕末まで同地の代官を勤めました。ちなみに陣屋とは今の役所にあたり、そこで政務や治安を司った役人を代官といいます。現存する建物は代官屋敷の主屋と蔵ですが、以前はその隣に陣屋があり、堀と石垣で囲われ、表門を開いていました。陣屋と主屋には式台しきだいのついた立派な玄関があり、武家屋敷らしい接客を重んじた佇まいだったと伝わっています。

また、富田家が公務で記した膨大な記録は、郷土史本宿研究会の皆さんによって調査され、その一部は土蔵に展示されています。

明治36年に富田家は陣屋の跡地で病院を開業し、以来120年近く岡崎の地域医療を支えています。



土間を改修したホールと小屋組み

木南舎からユギーノユーゴへ

現在、レストランに改修された主屋は、煙出しの越屋根こし根が上がる姿が特徴的で、建物の南側に立つ楠の大樹から木南舎もくなんしゃと名付けられていました。

お店は、かつての土間に入り口が設けられ、

富田家の家紋が入った朱色の暖簾が目印になっています。中へ入ると、吹き抜けのホールに木太い小屋組みが架かり、シックな色のタイルのカウンターと合わせて、オシャレな雰囲気を出しています。

その先に居室を改修したテーブル席があり、外には楠のある庭が見えます。庭の一部は、石垣とともに代官屋敷だったころの姿をとどめる貴重な遺構です。また厨房に隣接したカウンター席は、隠れ家的なオシャレな空間となっています。

バリアフリーへの思い

お店のホールとテーブル席の取り次ぎには、車椅子の方のための昇降機がつけられています。ご当主で富田病院院長の富田裕さんは、「患者さんやそのご家族にも美味しいものを召し上がっていただきたい」という思いから、バリアフリーにこだわりました。

富田さんが手掛けたレストランは、地域の活性化と地域医療が結びついた全国的にも新しい試みです。その中心で、家の歴史を伝える建物が生き生きと活用されている姿に、深い感動を覚えます。



テーブル席。バリアフリーを考慮し土足で上がれる

木南舎／1827年、
土蔵／1876年(明治9年)(共に平成30年改修)
木南舎 木造2階建て、切妻造瓦葺き(越屋根つき)、
土蔵/木造2階建て(一部平屋)、切妻造瓦葺き、
「設計」不明「改修」戸田工務店、松永和廣設計事務所、
土蔵「設計」一級建築士事務所
岡崎市本宿町字南中町23
<https://yugino.com>

登録文化財で昼食を



冬の湊屋御飯。あゆの甘露煮、ざんなんご飯、赤だし、茶わん蒸し、煮豆、酢の物、和え物、煮物などが所狭しと並べられる

湊屋の湊屋御飯

素敵な建物で美味しい食事をいただけるのは、豊かな時間を過ごせる最高の贅沢なのかもしれません。ここでは、登録文化財の住宅で味わえる指折りの名品をご紹介します。

まずは茶店湊屋の湊屋御飯から。季節によつて献立を変える料理は、主菜から漬物まですべて手作りで、丁寧に下拵えされるため、前日までに予約が必要となります。骨まで美味しいあゆの甘露煮は、ほんの少しほろ苦いざんなんご飯との相性も抜群で、笹の葉とあわせた彩りも美しいです。また、おからと柿の和え物や茶わん蒸し、汁物などの副菜も、いずれもとても手が込んでいます。

そして、大鉢に盛られた煮物は、みんなで分けられるのも楽しいです。
最後に、甘味として用意されたおはぎは、お持ち帰りできるのも嬉しい心遣いです。

ユギーノユーゴの八丁味噌のラザニア

次は、旧富田家住宅を改装したリストランテ ユギーノユーゴから。



photo: Hisao Takeuchi

ユギーノユーゴ名物の「ラザニア八丁味噌風味」。焼けた味噌の香ばしさとチーズのコクが交わり、絶妙のハーモニーを生み出す逸品

為三郎記念館のお抹茶セット

最後は、為三郎記念館の数寄屋 de Cafe で提供される抹茶と和菓子です。美しい庭を眺めながら、古川為三郎が愛した銘菓「梅屋」の和菓子と抹茶をいただく優雅なひと時は、都心部の喧騒を忘れさせてくれます。

おすすめは為三郎にちなんで作られた夢寿夢寿。餡を黒糖羊羹で包んだ可愛らしい姿にコクのある上品な甘さが絶品のお菓子です。



photo: Hitoshi Kumamoto

お抹茶と夢寿夢寿。ネームプレートは茶碗の作者名で、為三郎記念館とゆかりのある作家の手になる

今回ご紹介したいだけの店も、おもてなしの心が行き届いた名店揃いです。もし近くに立ち寄った際には、ぜひ訪ねてみてください。美味しい食事と素敵な建物が迎えてくれるはず。



photo: Akihiko Mizuno

小屋裏に広がる劇的な空間。換気用の窓から光が差し込み、和小屋を神秘的に浮かび上がらせる

川田家住宅

劇的な小屋裏のある、町家を転用した農家



格子のはめられた町家側の外観

養蚕のまち

建物はしばしば、予想できない魅力を生み出すことがあります。川田家住宅は、そんな魅力に出会えるユニークな建物です。

川田家住宅のある扶桑町は、かつては養蚕のための桑畑が一带に広がり、現在でも大通りから脇道へ入ると、畑の広がるのどかな風景が続いています。

登録文化財になって

川田家住宅の反転された構成は、登録文化財の申請時に発見されたといえます。そして、そんな調査を通じて建物の魅力に改めて気づいたのが、他ならぬ所有者の方々でした。現在は、建物の魅力をより多くの人々に伝えるため、高齢者向けサロン「わくわくサロン」などを開催し、地域に開かれた施設として活用されています。

古い建物の調査を通じて新しい発見をし、思いも寄らない魅力を持つ建物に出会えることは、建築を研究する醍醐味だと思います。



ベンガラ色の壁が映える東側の外観

川田家はこの地で畑作を営んだ農家で、二代目の川田源助が種屋川田商店を開き、品種改良した大根の種の販売を始めました。そして三代目伊兵衛が貸金や保険などの金融業で家業を発展させ、財を成したといえます。現存する住宅は、その三代目が近郊の町家を購入して移築した建物になります。

町家から農家へ

町家があったのは上街道の通る犬山市の羽黒地区で、元は造り酒屋を営んでいた商家の建物だったと推定されています。その町家を移築した時に、格子の付いた正面を裏に回し、裏側を畑のある表へ向けて農家として再利用しました。

空間構成を少し詳しく見てみましょう。平面は通り土間に部屋が隣接する縦並びの六間



ナカノマに架かるはしご

予期せぬ美

そんな変遷は、建物に思わぬ魅力を生み出しています。東の妻側に見えるベンガラ塗りの壁面は、もとは来客用の便所と繋がっていましたが、今は透けた濡縁とともに、外観に面白い彩りを与えています。

またナカノマにある2階へ上るはしごは、南側の庭から入る日射しに照らされて、とても魅力的な階段になっています。

とっておきは、そのはしごの先にある小屋裏です。かつて養蚕に使用された小屋裏に換気用の窓から光が差し込み、棚や天井の撤去されたフラットな床面で反射され、眼前で組み上がる和小屋を浮かび上がらせます。迫力ある造形は、意図された意匠ではないため、神秘的な雰囲気すら漂わせています。

1891年(明治24年)・1917年(大正6年)移築
木造2階建て(入母屋造・棧瓦葺き)
〔構造:川田治兵衛 移築〕
丹羽郡扶桑町大字南山名字前ノ前49
<https://www.kawatakejyutaku.org>



photo: Hisao Takeuchi

出格子で構成される主屋の外観。住宅街の道路に間口18mの町家が突如現れる不思議な風景

旧石原家住宅(石原邸)

住宅街に潜む、町家アート・ミュージアム

石原家住宅の歴史

石原家は、岡崎城下の総持尼寺の寺領で米穀業や金融業を商い、同地の庄屋を勤めた商家でした。また、総持尼寺との機縁から公家との交流も深く、幕末には勤王家を自宅に迎えたと伝わります。

現存する町家や土蔵が建てられたのもその頃で、随所に見られる洗練された意匠や家財道具からは、当時の隆盛ぶりが伺えます。

家業はその後、戦前まで受け継がれ、空襲の被害も受けましたが、戦後にになると営業を終了しました。建物はそれ以降、ピアノ教室や料亭、喫茶店などに使用され、現在に至ります。

雅なしつらえ

旧石原家住宅は、甲山古墳の下を通る古い道路に面して18mの間口を開いています。繊細な出格子で構成されるファサードは



丁寧に掃除された土間とクド

周辺の住宅街から浮いて見えますが、いまではまちの古さを物語る貴重な存在となっています。

イベント時には裏手の門から敷地に入り、まず小さな石橋を渡ります。それを渡ると塀に囲われた苔庭があり、水の撒かれた庭は木立のすき間から刺しこむ光を受けて、幻想的な風景を見せてくれます。

主屋の裏手には、きれいに掃除された土間が戸を開けていて、午後になると室内深くまで光が射し、とりわけクドを明るく照らし出す。土間に足を踏み入れると、小屋組みが中空を渡り、太い梁を支える束が細い鴨居の上に乗って、緊張感のある面白い景色をつくっています。

インスタレーションは六間取りの居室に分けて展示され、隣り合う空間同士が緩やかに連結し、流動的な和風建築の特徴が生かされています。開け放たれた空間は、表の出格子から裏の庭まで風が流れて、爽やかな雰囲気ภายในに漂っています。

アートに込められた思い

旧石原家住宅でアートイベントが始まったのは2015年のこと。住宅を受け継いだ



石原家に残る古道具を重ねたオブジェとタペストリー

期間限定の古民家アートイベント

秋の週末に行われる「あいちのたてもの博覧会」にあわせて、年に一度のアートイベントが岡崎市の旧石原家住宅で開催されます。

この日に向けて手入れされた邸内では、家まつわる古道具類を積み重ねたオブジェや、庭で採取した植物を用いた床飾り、タペストリーに書かれた書などがしつらえられ、雅な和風空間がユニークなインスタレーション・アートの展示空間へと生まれ変わります。

大辻織絵さんは、歴史ある家へのさまざまな思いを込めて作品を制作・展示し、参加者をもてなしてきました。

雅な町家の意匠とインスタレーション・アートが混じり合い、掃き清められた空間を彩る一日は、毎回多くの参加者を楽しませています。



主屋の裏手に広がる苔庭

主屋 / 1860年-1978年(昭和53年)改修
主屋 / 木造平屋建て切妻造瓦葺き
「棟梁」藤原大野源兵衛泰明
岡崎市六供町字杉本70
<https://www.oreosuji.com/> 旧石原家住宅 /



photo: Akihiko Mizuno/Sayaka Ito

台所を見る。正面の大きな出窓からは、高低差のある隣地の緑が見え、柔らかい光が空間全体に拡散される

川原田家住宅

大正期の新興住宅地に残る、機能美に満ちた中廊下住宅

台所の美

住宅設計で施主のこだわりが強く反映されるのは台所だといえます。使い勝手がひとりひとり異なるからです。暮らしについて紹介する雑誌で台所特集が多いのも頷けます。

そんな台所ですが、現在のようには整備されたのは最近のことで、それ以前は狭くて暗く、不衛生で、大正期の住宅改良運動ではまっさきに手を加えられた場所でもありません。

昭和初期に建てられた川原田家住宅は、

それがもつともよく現れているのが台所です。台所には横長の大きな出窓があり、上部には換気用の小窓もあります。天井が高く、また近年の改装で広々とした台所は、窓から穏やかな光が染み渡り、暮らしへの心づかいに満ちた素晴らしい空間となっています。

次世代へ託す文化財

川原田家住宅は、施主だった川原田信男さんの思いを汲み、現在まで大切に維持管理されてきました。そして、今後も建物がきちんと保存されていくことを願って、次の所有者に委ねることを検討しています。

受け継いだ文化財の行く末を考え、どのように継承させていくのか。難しい問題に真摯に向き合う所有者たちの姿には、頭が下がります。



中廊下の突き当りにある窓

そんな新しい暮らしが求められた過渡期に誕生した中廊下型の住宅です。そして一番の見所は、明るくて広々とした台所にあります。

宅地開発と丹羽英一

川原田家住宅のある名古屋市昭和区の南山町は、大正から昭和にかけて耕地開発された場所で、目の前には登録文化財の南山学園ライオネルズ館がたっています。

丘陵を下った角地にある川原田家住宅は、コンクリート造の立派な石垣と塀で囲われ、開発以降に育った木々が生い茂っています。



居間と和室、台所が繋がった美しい空間

中廊下住宅と設備の美

数寄屋風の玄関に入ると、きれいなタイルが迎えてくれます。取り次ぎの凝った障子紙を横目に廊下を向くと、正面に木枠の大きな窓があり、中廊下の暗さが巧みに解消されています。

川原田家住宅の魅力のひとつに多様な窓の造形があり、玄関に隣接する洋間の窓や、居間の窓、階段上部の窓など、空間の性質と方位に合わせてたくさんの窓が開けられ、換気と採光に配慮されています。

主屋 / 1937年 昭和12年
主屋 / 木造2階建て 入母屋造 檼瓦葺き (一部銅板葺き)
「設計」丹羽英一 建築事務所
名古屋市昭和区南山町25-4 他



photo: Akihiko Mizuno

主屋の外観。赤い銅板葺の下に茅葺屋根がある。置千木などの屋根飾りは、壬生神社で三井家の霊神が祀られた名残

三井家住宅

特集 2



仏間を見る。縁側の先に弘法大師の石仏が祀られている

武豊町の庄屋
 登録文化財の中には、重要文化財や指定文化財になることで、より手厚い保護を受ける建物も少なくありません。武豊町にある三井家住宅は、ご当主をはじめ地元の有志者として行政が協力し合い、令和3年に町指定文化財になった建物です。

時間をかけてようやく収まるところを得た三井家住宅は、これからもまちの歴史を伝える建物として親しまれていくことでしょう。

三井家は江戸中期ごろから約1000年に渡って知多半島東部の庄屋を務めました。代々「傳左衛門」を名乗り、庄屋に就いた三代目に苗字が許され、四代目のときには尾張徳川家から「三井」の永代苗字と三振の刀を賜ったと伝えられています。
 四代目三井傳左衛門は、飢饉の折に900両もの借金の保証人になって村人を救い、また近郊の村同士の間では調停に尽力したといい、現在でもその功績をたたえる足跡が残されています。

登録文化財から町指定文化財へ

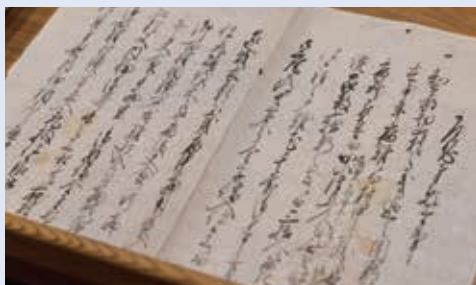
建築的に興味深いのは主屋で、一般的な民家に比べて複雑な平面構成になっています。これ



北土蔵。高い石垣に載る黒い蔵が豪社

は「四つ建て」といって、屋根を支える4本の主柱とそれを繋ぐ梁で構成された中心部から、庇を増築したためと考えられています。

三井家住宅は丘の上にたち、建具を開け放つと気持ちの良い風が通り抜けます。かつてはここから衣浦湾も見渡せたといひ、付近には武雄神社や旧長尾小学校などがあつた村の中核をなす場所でした。



三井家の古文書。約4万6千点が残されている

また現在は銅板が葺かれています。その下には茅葺屋根があり、置千木や鞭懸が突き出る姿は、高い石垣に乗る北土蔵とあわせて、まちのランドマーク的な存在となっています。
 三井家住宅には全国最大級の貴重な古文書が残され、それらも文化財として武豊町歴史民俗資料館で大切に保管されています。長い



重要文化財に指定されている名古屋市庁舎や愛知県庁舎も、少し前までは三井家住宅と同じく登録文化財だったんですよ



photo: Akihiko Mizuno

間に包まれた空間。オエから大戸方向を見る。現在、大戸にはガラスが嵌められている。上部は煙抜き窓

又兵衛

原初の日本人の住まいを体現する、合掌造りの古民家



合掌造り頂部の原始的なディテール

闇の空間
熱田神宮の境内に、日本人の古い住まいのかたちを残す素晴らしい建物があることをご存知でしょうか？ 名前を又兵衛といい、元は岐阜県飛騨市の山間部にあった農家で、戦前に名古屋に移築され、その後熱田神宮へ移されました。
現在は大屋根を赤い鉄板が覆っていますが、その下には茅葺きがあり、合掌造りの小

屋組みや、太い柱と梁の明快な軸組、また大きなオエを中心とした間取りなど古い形式を色濃く残した、全国でも稀な建物です。

飛騨から名古屋へ

又兵衛のあった旧末真村は、飛騨古川駅の北西に位置し、宮川から上ったあたりの小さな村で、江戸中期頃には20棟ほどの茅葺屋根の住宅があったといえます。

名古屋に移築されたのは昭和11年のことで、後に名古屋テレビ塔を創設し初代社長を務めた神野金之助の強い希望で実現しました。又兵衛の名前は、元の所有者の坂上又兵衛にちなんで付けられました。

移築には名古屋の城戸久教授が携わり、神野邸では茶室として使用されました。また、昭和32年に熱田神宮へ寄贈された時にも、城戸教授が指導にあたった



外観。熱田の杜に囲まれ、異世界感が漂う

といえます。

現在の又兵衛は、お茶会や結婚式の披露宴会場などに使用されています。

古民家のみかた

又兵衛が建てられたのは、江戸初期から中期頃と推定されています。少し前の古民家の年代測定では、軒先や床面の低さや、柱・梁などの太さ、表面に残る手斧の跡などから分析されることが多く、又兵衛はそれを満たしていたことから、当初はかなり古いものと推測されていました。一方で、雨戸に残る墨書には文化六年とあり、またデイに天井があることなど、比較的新しい要素も見受けられます。

実は又兵衛は、末真村へも移築されてきたという伝承があります。平成13年の解体修理の折には詳細な調査も行われましたが、年代の特定には至っていません。

原初の住まい

現在の又兵衛は、赤い鉄板屋根や庇つきの通路が付随し、内部には大きな照明が吊られ、床にはゴザが敷かれて、当初の姿を想像することは難しくなっています。

ですが、館内の照明をすべて落とし、雨戸を

閉め切ると、驚くほど深い闇に包まれた空間に変貌します。広々としたオエに腰を下ろすと、がっしりとした柱や梁に囲われ、大屋根が覆いかぶさってくるような錯覚に襲われます。大戸や煙抜きから射す光を頼りに見回しても、視線は闇へと引き込まれていきます。

オエはかつて土座だったとい、縄で固定された合掌造りの姿と合わせて、原初の日本人の住まいを思い起こさせます。静寂に包まれた深い闇の空間に身を浸すとそんな遠い昔の感覚が呼び覚まされるようで、言い知れぬ感動に身震いします。



土間とオエを仕切る板壁。軸部が太い

不明(江戸中期と推定)、1936年(昭和11年)及び1957年(昭和32年)移築
木造平屋建て・入母屋造茅葺き(鉄板仮葺き)
[移築・調査]城戸久
名古屋熱田区神宮1-1-1
<https://www.atsumaiingur.jp>

開く

博物館明治村には多くの住宅建築が移築・復原されているが、それらは必ずしも建築的な価値のみに重きを置いたものではないという。住宅には建築的価値を超えた何かが染み付くことがままある。



重要文化財 望月家住宅

【東三河の釜屋建て】

愛知県の東三河地方には、この地方特有の二つの建物が軒を接して並ぶ民家があり、中でも新城市の望月家住宅は、古いかたちを残す民家として重要文化財に指定されています。

興味深いのが、二つの建物が内部でひとつなぎの空間になっていること。釜屋と呼ばれる土間と、居室のある主屋は屋根の谷の部分でつながり、間には檜を削り貫いた大きな雨樋が設けられて、排水に工夫されています。

このような形式を「釜屋建て」といい、全国に残る分棟型の民家の中でも珍しいタイプで、かつては東三河地方の豊川沿いをはじめ、天竜川流域や浜名湖の北部などに分布していたといえます。

屋内には天井がなく、むき出しの茅葺屋根の小屋組みがまるで巨大な傘のように頭上を覆い、また軒下で反射した光が小屋組みを浮かび上がらせる姿は、とても迫力ある美しい造形を見せてくれます。

望月家住宅は、昭和49年に重要文化財に指定された後、増築された部分や軒下の縁側を取り除いて、ほぼ創建時の姿に戻されました。現在は十四代当主の望月靖雄さんが管理し、一般に公開されています。

都心から少し離れると、地域特有の気候や風土に育まれた素晴らしい古民家が、意外なほど近くに残されています。

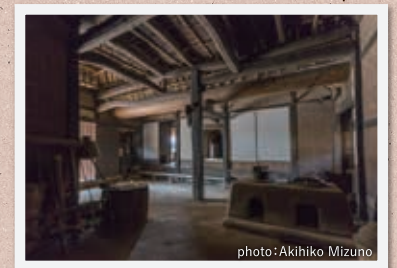


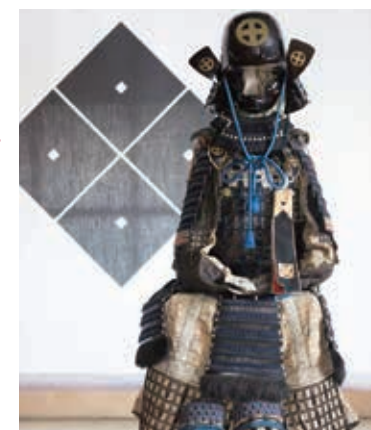


photo: Akihiko Mizuno・Sayaka Ito

白と黒のコントラストが目を引く外観。以前は2階も黒漆喰で、白砂の前庭にも植栽が繁茂していた

旧堀部家住宅(木之下城伝承館 堀部邸)

武家の気品の漂う、民間運営の伝承館



2階の座敷に飾られた甲冑

犬山の武家風住宅

国宝犬山城をいただく城下町にはたくさん
の登録文化財があり、情緒ある町並みを形成
しています。その中のひとつ、旧堀部家住宅
は、武家の住まいの気風を伝える、愛知でも
数少ない邸宅です。

堀部家は、代々犬山城主の成瀬家に勘定方
として仕えた家柄で、明治以降はその経験と
実績を生かして金融業や運輸業を展開し、成
功を収めました。特に十二代目堀部勝四郎
は、犬山の商工会議所の重役を務め、濃尾地
震で半壊した犬山城の修復に貢献し、また木
曾川に架かる犬山橋の建設にも尽力した、地
元の名士としても知られています。

活用のかたち

現在、旧堀部家住宅は犬山市が所有し、地
元の歴史や文化を発信する「木之下城伝承館
堀部邸」として使用されています。管理する
NPO法人ニワリネットは、市側へ家賃を払っ
て運営する全国的にも珍しい方式を採用し、文
化財をより自由に活用しています。

その一環として迎えられた店子の「みな蔵」
は、土間でカフェを経営し、隣接する和室で
提灯工房を開き、作品制作や
ワークショップ
などを積極的
に行っています。
提灯に彩ら
れた邸宅は、以
前よりも親し
げに来館者を
迎えてくれるよ
うに感じます。



和室との親和性も高い提灯工房

その勝四郎が建てた主屋は、財界人や文化
人たちの交流するサロンとしても使用するた
め、格式のある武家風にしつらえたと考えら
れています。

フォーマルな空間

堀部家住宅は、犬山城旧外堀の大手門に
あった櫓形の前に位置し、明治初頭にはこの



座敷。障子のプロポーションが美しい

場所で養蚕業を営んだといえます。現在の邸
内は明治16年以降に整備されたもので、道路
に面した黒い高塀は昭和に入ってから建てら
れました。

道路から眺めると、主屋の屋根と下屋の庇、
高塀の屋根が重なって一体感のある外観とな
り、また2階の白い漆喰壁が間隔を開けて
分割され、おおらかな表情をつくっています。

大戸に掛けられた白い暖簾をくぐると、
吹き抜けの土間が奥の庭まで続き、でこぼ
こした三和土が風合いを帯びて美しいです。
式台の先には畳の敷かれた和室が2列横並
びで六間あり、一番奥の座敷には角柱に長押
がめぐり、床の間と床脇が備わった書院造と
なっていて、仏間とともに格式の高い部屋と
なっています。両側には縁側がめぐり、それ
ぞれ趣の異なる庭に開かれ、障子を開放す
と、明るく開放的な広間になります。

広間の中央には2階へ上がる箱階段があり、
オブジェのような面白い景色をつくっています。
2階は上り梁の見える広い空間となっていて、
かつてはここで養蚕が行われていました。
また、階段脇にある背の低い座敷には銀の屏
風と甲冑が展示され、隠れ家的なギャラリー
となっています。

主屋／1883年(明治16年)
主屋／木造2階建て、切妻造機瓦葺き
「横窓・河村清右衛門(主屋)
犬山市大字犬山字南古券272
<https://horibe.jp>



photo:Hitoshi Kumamoto

爲春亭の庭からの眺め。雁行する配置や高床の構成、随所に見られる草庵風の意匠が名苑桂離宮を彷彿させる

爲三郎記念館

実業家古川爲三郎が愛した、瀟洒な数寄屋建築



ケレン味のない格式の高い玄関

覚王山の隠れ家アート・ミュージアム

名古屋の都心から少し離れた覚王山地区に、オシャレで隠れ家のような和風建築のアート・ミュージアム「爲三郎記念館」があります。瀟洒な数寄屋造の館内では美味しい抹茶と甘味が提供され、丁寧なおもてなしでハイソな気分が味わえる、人気のスポットとなっています。近くには実業家の古川爲三郎が収集した

コレクションを公開展示する古川美術館があり、爲三郎記念館はその分館にあたります。

古川爲三郎の邸宅

爲三郎記念館はもとも古川爲三郎の住まいで、その前は料亭旅館の別館だったと伝わっています。貴金属商から身を起こした爲三郎は、映画の興行や炭鉱の経営を経て、戦後に日本へラド映画株式会社や不動産投資で成功を収めました。建物を含むこの土地を購入したのは昭和20年のことで、103歳で亡くなるまでこの家に住み続けました。生前から篤志家として知られた爲三郎の意

向で、自邸は一般公開されることになり、美術館の分館として改修されました。

近代数寄屋建築の意匠

木々の生い茂る邸内には、草庵風の立派な正門から入るのがおすすです。迎え水が打たれたアプローチをゆっくり下ると、幽谷へ入るような心持ちになります。主屋の爲春亭の格調の高い玄関を通り過ぎ、その横の野点傘が立つショップ側から入館します。

館内には数寄屋造の意匠が至るところに散りばめられ、目を楽しませてくれます。このような凝ったつくりは、名古屋の茶の文化と深く関わっていて、数寄屋建築を作る際に茶の宗匠が監修を務め、庭や建物が洗練されていたといわれています。

爲三郎記念館の一番の見所は、庭の広場からの爲春亭の眺めです。雁行する建物が庭の木々や植栽と調和し、窪地を流れるせせらぎの音や空気と一体となって、美しい景色をつくりあげています。また懸造りの軽やかな姿が、数寄屋の気分を高めているのもポイントです。庭の奥には織田有楽斎が手掛けた国宝如庵に做った知足庵があり、風景に華を添えています。

インスタレーションのある風景

爲三郎記念館のもうひとつの特徴が、和風の空間で現代アートの展示やインスタレーションを行なっていることです。インテリアデザインナー内田繁が手掛けたインスタレーションでは、和室に自作の椅子とプールの設置し、反射した光で空間を演出する作品が話題を呼びました。そんな繊細な数寄屋造の世界を大胆にアレンジするアート・イベントは、古川美術館の職員と協力して行われています。また開館前の苑内では、彼らが丁寧に掃除する姿を目にします。

爲三郎記念館の美しい風景と行き届いたおもてなしは職員たちの努力によって支えられているのです。



茶人の名にちなんだ茶室太郎庵



焼物の展示された、ひさごの間

爲春亭／1934年(昭和9年)、知足庵／1936年(昭和11年)

爲春亭／木造平屋建て(一部地下1階) 入母屋造瓦葺き、知足庵／木造平屋建て 入母屋造銅板葺き

「設計」不明
名古屋市中種区堀割町1-9
https://www.turukawa-museum.or.jp/memorial



photo:Hitoshi Kumamoto
長崎居留地二十五番館の鳥瞰。本館(左)と別館(右)から成り、ベランダが底状に1段下がつて柔らかな表情をつくっている

博物館明治村の住まい

特集3



東松家住宅の外観。堅牢で迫力ある姿

東松家住宅

愛知が誇る近代建築の聖地、博物館明治村では、近代日本の住宅史の変遷を実物で辿ることが出来ます。

最初にご紹介するのは東松家住宅です。名古屋市の堀川沿いで油問屋を営んでいた東松家は、明治の中頃に堀川貯蓄銀行を開業し、それにあわせて建物を3階建てに増築した町家です。



東松家の土間

黒漆喰に格子窓を開けた堅牢な外観の店に入ると、3層吹き抜けの背の高い土間が迎えてくれます。木造の3階建てが一般に認められたのは明治前後のことで、大正8年には禁止されました。

東松家住宅の一番の見どころは2階の茶室です。土間上空に張り出した露地のような廊下を通ると、巧みに配された待合や茶室があり、吹き抜けに隣接した浮遊感のある空間をつくりだしています。

めの良い南山手地区にあった建物で、同地区には大浦天主堂もあります。この家には我が国の造船に功績を残した技師ジョン・コルダーが住んでいました。

正面に玄関を置き、左右対称に居室を配したベランダのある構成は、長崎の居留地によく見られたコロンニアル様式の住まいです。また、構造材と建具枠が一体となった和風建築的な細部も見どころです。

後方にはコーナーで繋がる別館があり、洋風の外観の奥には和室が設けられています。現在は軍艦島の展示が行われていて、詳細なパネルや巨大な模型は見応え満点です。

長崎居留地二十五番館

次は、広いベランダが特徴的な長崎居留地二十五番館です。元は、長崎港を見下ろす眺



長崎居留地二十五番館のベランダ



芝川又右衛門邸の外観

設計者の武田五一は、スパニッシュ様式やセセッション、それに数寄屋造の意匠を混ぜ合わせて、独自の美しい世界をつくりあげています。特に見事なのが2階の小座敷です。建具を閉め切って細部の意匠がざわめき立つ瞬間は、思わず感嘆の声が漏れます。

芝川邸の移築と復原には、愛知で多くの古建築の修理や保存を手掛ける魚津社寺工務店が協力しています。またタイルに関してはINAXライブミュージアムのもづくり工房が担当し、芝川邸で蓄積された調査方法や復原の技術が日本多忠次邸へと受け継がれました。



芝川又右衛門邸の小座敷

芝川又右衛門邸

最後は関西経済界の重鎮、芝川又右衛門の別荘です。この建物は阪神・淡路大震災の折に被災し、解体を惜しんだ所有者から寄贈を受け、一番新しく移築された建物になります。



神戸山手西洋人住居のベランダ。列柱が美しい

長崎居留地二十五番館のすぐ隣にたっているのが、神戸山手西洋人住居です。階段を下って建物へ近づくと、2階建てで浅葱色の美しいベランダが迎えてくれます。

この建物の見どころは、なんといってもベランダの列柱です。よく見ると柱の数が違い、コーナーでは3本、正面玄関の前は2本配置されています。これは元の狭い敷地に対応した工夫で、ベランダの平面もL字の不整形ですが、それを感じさせない巧みなデザインです。

また奥には別棟の建物があり、2階にある客間には渡り廊下からしか入れないというアクロバティックな構成がとて面白いです。

神戸山手西洋人住居



神戸山手西洋人住居の渡り廊下

明治村では、復原された建物を通して当時の暮らしをリアルに体験することができます。150年間で劇的に変化した日本人の住まいを、ゆつくりと旅してみたいかがでしょうか？

東松家住宅の3階はスキップフロアみたいになっていて、廊下の板戸に描かれたすずめの絵がとってもかわいいんですよ





夕日を受ける日本多邸。クリーム色の外壁にアーチのベランダ、赤い洋瓦のスパニッシュ様式は、遠くからでもよく目立つ

photo: Akihiko Mizuno

日本多忠次邸

旧華族が丹精込めて作りあげた、スパニッシュ様式の洋館

住宅設計の妙味

日本多忠次邸は、住宅設計の奥深さを伝えてくれる大切な建物です。それは、この住宅の設計を主人自らが手掛け、身体の一部のように神経を行き届かせて、ほぼ改築することなく約70年のあいだ暮らし続けたことに尽きています。

現在は岡崎市の東公園にたっています。以前は東京の世田谷区にあり、平成24年に同地へ移築・復原されました。

施主兼建築家、本多忠次

本多忠次は、徳川家康に仕えた本多忠勝の子孫にあたり、旧岡崎藩主や貴族議員を務めた子爵の家柄に生まれました。次男だった忠次は、帝大で学んだ後に家を出て不動産や株取引で生計を立てたといわれています。

復原の到達点

忠次が亡くなった後、老朽化した建物は解体も検討されましたが、ご家族と研究者たちにより保存の道が探られ、本多家と縁の深い岡崎へ移築されることになりました。

丹念な調査を経て復原された建物は、その家で暮らしたご家族から見ても違和感のない出来栄であったといえます。



2階のお茶室。アール・デコ調の什器がモダン

シャツとストラックスを着用し、質素倹約で凝り性、山や植物を愛し、潔癖症だったという忠次が、36歳のときに1年がかりで建てたのがこの建物になります。設計に際して残された資料には、住宅設計の高手たちの作品や、日差しの角度計算、平面図やランプシェードのスケッチなどが記され、忠次の並々ならぬ思いが窺えます。熟考の末、忠次が採用したのはスパニッシュ様式の洋館でした。

こだわりの造作

日本多邸のクリーム色の外壁やアーチが連続するベランダ、赤い洋瓦を葺いた屋根に、タイルをふんだんに用いた室内装飾は、スパニッシュ様式の特徴をよく表しています。

一方で忠次は、平面計画に中廊下型を採用しています。庭園側には団欒室や食堂、夫人室を配し、反対側には女中室や台所がまとめられています。

とりわけ目を引くのが随所に設けられた水回りです。玄関の壁泉をはじめ、外から直接入浴できる風呂には全面にタイルが張り巡らされ、ステンドグラスと合わせて美しい空間となっています。

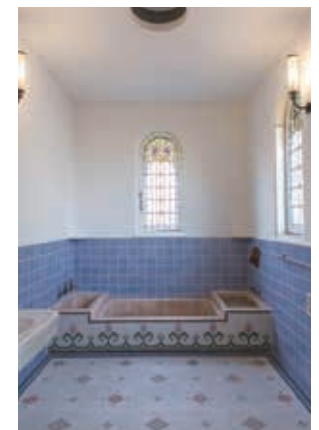
2階はさらに個性的な部屋が設えられています。庭に面して並ぶ和室には座敷飾りが付き、窓ぎわに縁を通すことで洋風の外観と和室を取り持っています。

また隣接するお茶室は、一転してアール・デコ調のデザインでまとめられています。忠次は紅茶を好み、この部屋だけにあつらえられた内装からは、凝り性の顔を垣間見ることが出来ます。2階へは子どもは入ることが許されなかつたといい、厳格なしきたりが最近まで残っていたことを感じさせます。



2階の客間。格式の高い書院造の床飾り

1931年(昭和6年)・2012年(平成24年) 移築
木造2階建て(一部鉄骨造)
[設計] 本多忠次 白鳳社建築事務所
岡崎市欠町字足延40-1
<https://www.city.okazaki.lg.jp/1100/1109/1162/p011774.html>



1階の風呂。タイルの復原はINAXライブミュージアムが担当した

三州足助屋敷



【昔の暮らしを体験できる文化施設】

紅葉の名所として知られる足助町香嵐溪には、茅葺屋根の建物が集まる三州足助屋敷があります。

この施設は、昔ながらの手仕事を残す目的で足助町が建設した民俗資料館で、茅葺屋根の建物のほとんどは昭和55年に建てられました。ちなみに、設計を担当したのは倉敷出身の建築家浦辺鎮太郎で、施工は地元の大工たちが古い技術を用いて建てました。

屋敷内には地元の鍛冶屋をはじめ、木地屋、炭焼き、竹細工、染め物、機織り、紙すき、傘屋などの工房があり、実際の作業風景を見学できます。また、それらの作業は体験することもでき、平日には社会見学に訪れた小学生たちがワークショップで弾んだ声を上げています。

見どころの多い施設内で一番のおすすめは、大きな茅葺屋根の母屋です。大戸をくぐると土間の奥には大きなクドがあり、カッテの囲炉裏では常に火がくべられています。クドでは従業員たちが自らの食事を作り、ここも実用の場として公開されています。また、煙にいぶされた吹き抜けの小屋組みは、40年ですっかり煤にまみれ、風合いのある姿となっています。

生きた暮らしの文化が味わえる三州足助屋敷は、年月を経てますます魅力ある施設となっています。



飯田喜四郎先生 特別インタビュー

住宅を文化財として残すこと

私は以前、愛知県の近代化遺産の調査報告書を製作するときに、ここで紹介された住宅も見たはずなのですが、こうしてきれいな写真で見直すと、全然印象が違いますね。どれもとても面白くて新鮮でした。特に明治村の建物を撮ったドローンの写真がいいですね。こんな写真は初めて見ました(笑)

西洋建築史では貴族の邸宅を取り上げることはあっても、民家を取り上げることはまず無い。文化財として判断すると、どうしても漏れてしまうからです。それは保存についても言うことで、建物の価値だけでなく所有者の意向が大きく関わってくる。旧本多忠次邸も、場合によっては残らなかつたかもしれない建物でしたが、設備の面白さと所有者の強い意向があって、岡崎市が受け入れてくれました。

その一方で、残すことが出来なかつた建物もあります。私たちの仕事は残すための筋道を立ててあげることで、それ以上は難しい。

明治村にある東松家住宅も、持ち主は残すつもりが無かつたところを、名鉄と我々で交渉して譲ってもらいました。

ところで明治村といえば、森鷗外・夏目漱石住宅の移築・復原の際に、一緒に担当された太田博太郎さんと意見が衝突しましたね。あちらの方が先輩なので私が折れました(笑)また住宅史を研究している平井聖さんが小説『吾輩は猫である』と照会されたそうですが、面白い見方だと思います。

芝川又右衛門邸では、タイトルの復原をINAXライブミュージアムのものでづくり工房が頑張ってくれて、それが旧本多邸でも活かされたと同じました。タイトルメーカーがなくなつてレジビが失われていく中で、とても大事な仕事だと思っています。

住宅は増改築や建て直しもあり、文化財として歴史の中に残っていくのが難しい建物です。また暮らしとも密着しているため、その意味では建築の

枠を外れてしまう。ただ、だからこそ文化財として残していった方がいいとも思います。つまり、暮らしの歴史を含めて評価されるべきだと思うのです。

その時に私たちがするべきことは、建築の評価だけでは判断できない部分も汲み取ってあげることが肝心のだと思っています。

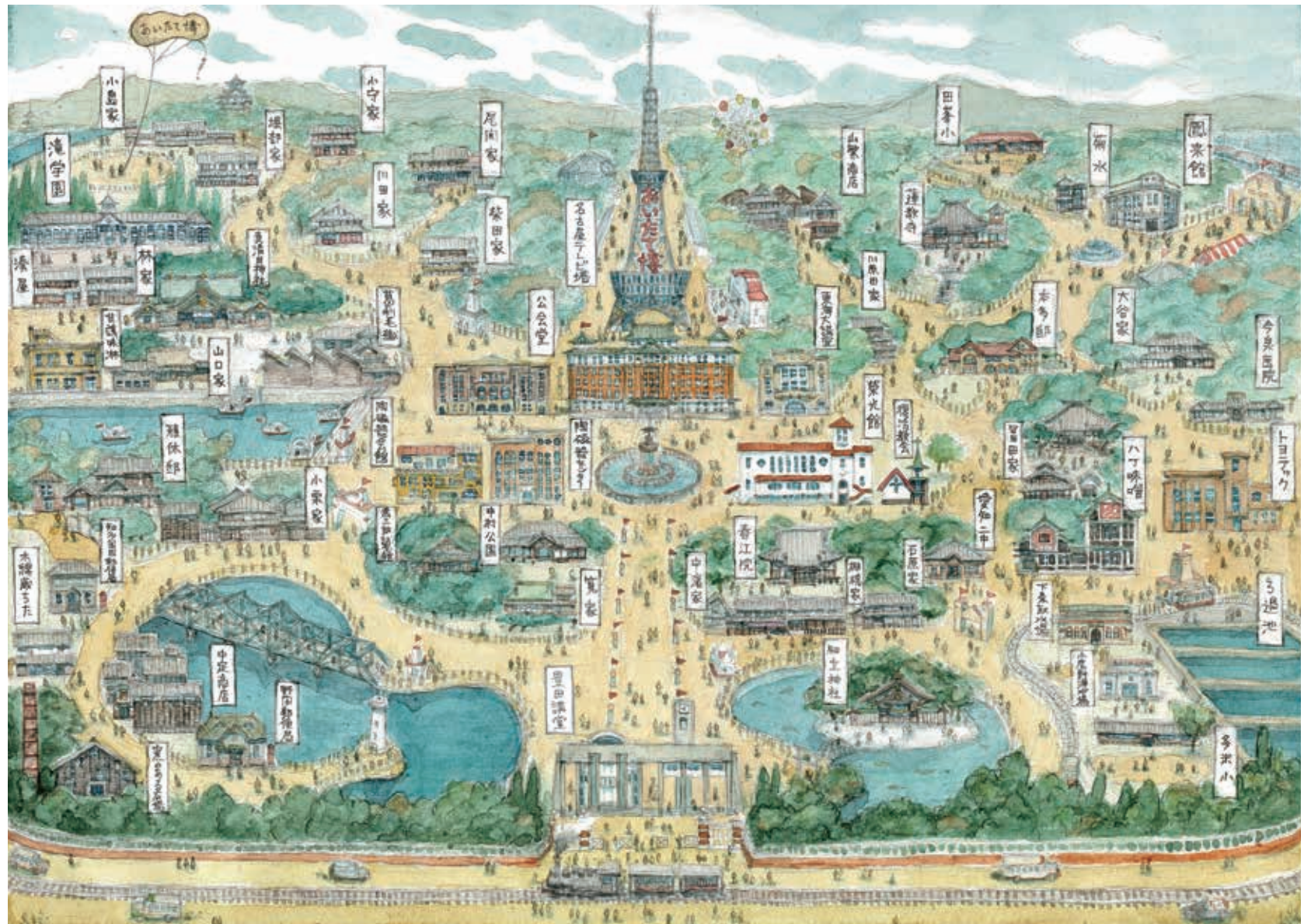
余談ですが、私が東大の建築学科にいたころ、5、6歳上に池辺陽がいて、戦後復興の最小限住宅について研究していました。ただ反響はあまりなかつたように記憶しています。実感として、とても暮らせる感じではなかつた。建築は無駄を省いてしまつたら何もなくなつてしまいますから。



飯田 喜四郎

1924年東京生まれ。名古屋大学名誉教授。東京大学大学院在学中にフランスへ留学。また博物館明治村の館長を長年務めた。

あいたて博と online あいたて博について



愛知県では、登録文化財を特別公開して建物の魅力を紹介する「あいちのたても博覧会(通称あいたて博)」を開催しています。

公開する建物は、本書でも取り上げた住宅を始め、産業にまつわる建物や学校、寺院や神社、教会にテレビ塔のようなまちのシンボルなど多岐に渡ります。

あいたて博では、建物の魅力をより深く知ってもらえるように、専門家や所有者が丁寧にガイドし、見どころを案内しているのも特徴です。

また、新型コロナウイルスの影響から、インター

ネットでも参加できる「onlineあいたて博」を開設し、動画を配信しています。

近年では活動の輪が広がり、やっとかめ文化祭や、名工大と鶴舞公園、名古屋市公会堂とのコラボイベントも開催しています。

2023年からは、これまでのあいたて博を継続しつつ、新しい企画を盛り込んで、より多彩なイベントを開催する予定です。

今後あいたて博の活動をどうぞご期待ください。

※「あいたて博」については愛知登文会のホームページで情報を発信しています。また「onlineあいたて博」は同ホームページかYouTubeチャンネルでご覧いただけます。

あいちのたてもの すまい編

2022年3月24日発行

発行者 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会 <http://www.aichi-tobunkai.org/>
 会長 小栗 宏次
 【事務局】名古屋市中区錦三丁目6番15号先
 名古屋テレビ塔株式会社内 info@aichi-tobunkai.org

編集・企画 株式会社 都市研究所スペースア

執筆 はじめに 飯田 喜四郎
 本文 村瀬 良太

写真撮影 水野 晶彦/熊本 仁志/竹内 久生/伊藤 朋香/ヨシダヒロシ

写真提供 小栗 宏次

制作協力 寛 清澄/博物館明治村/名古屋鉄道株式会社

題 字 水谷 月菜/村瀬 良太

イラスト・構成 村瀬 良太

デザイン 墨 昌宏 (有限会社エビスワード)



本冊子は「令和3年度文化庁文化芸術振興費補助金
 (地域文化財総合活用推進事業)」により作成しました。

国登録有形文化財とは

平成8年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

それまでは文化財指定制度に基づく重要文化財(その中でも、世界文化の見地から価値の高いものが国宝)が指定され、貴重な建物が手厚く保護されてきましたが、その数は多くなく、急激な都市化の進展などにより、近代の建造物はその建築史的・文化的意義や価値を十分に認識されないまま取り壊される例が相次ぎました。それを決定づけたのが平成7年の阪神・淡路大震災です。震災による被害を受けた多くの未指定文化財が取り壊されてしまいました。

その反省にたち、国レベルで重要なものを厳選する重要文化財指定制度を補い、より緩やかな規制のもとで、幅広く保護していく制度として文化財登録制度が創設されたのです。

登録の基準は、原則として建設後50年を経

過したもののうち、

- ①国土の歴史的景観に寄与しているもの
- ②造形の規範となっているもの
- ③再現することが容易でないもの

のいずれかに該当するものとなっています。

所有者の同意のもとに登録されるもので、登録されると相続税等の減免や保存・活用に必要の修理等の設計監理費などに対する補助を受けることができます。重要文化財と比べると補助は大きくはありませんが、厳しい規制がある指定文化財とは異なり、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められており、有効に活用していくことが期待されています。

なお、令和4年3月1日現在、全国で13,336件が登録され、愛知県は552件(全国5位)となっています。



登録文化財のプレート

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは

愛知県内の国登録有形文化財の所有者を中心とする会(略称:愛知登文会)で、登録文化財の保存・活用を推進することを目的に、平成23年6月に設立されました。

平成23年度より文化庁文化芸術振興費補助金を受けて活動を行っており、本書の作成もその一つです。この冊子を通じて、愛知県内にある様々な登録文化財の魅力を知っていただき、歴史的建造物の保存・活用にご理解・ご支援いただければ幸いです。

また、平成26年度から、登録文化財建造物の特別公開事業を開始し、日頃公開されていない文化財建造物の公開や解説などを始めました。平成31年度からは、名称を変更し、「あいちの建物博覧会(あいたて博)」として、愛知県内の歴史的建造物を広く公開しています。令和2年度には、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、対面での公開ができなくなりました。そこで公開手法を変更してSNS(YouTube)を

利用してオンラインコンテンツによる公開を実施しました。オンラインでの公開では、直接現場で見学することはできないものの、県外など遠方からの参加も容易となり、中には海外からの参加者も見られるなど、文化財建造物公開の新しい可能性を見る事ができました。こうした実績のもと、令和3年度では、対面での公開と、オンラインでの公開のハイブリッド型で実施し、更なる可能性を追求しています。

愛知登文会 会長 小栗宏次



YouTubeオンラインあいたて博のページ